
私がうちの彼とか無理すぎるw

銀月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私がうちの彼とか無理すぎるW

【Nコード】

N1429U

【作者名】

銀月

【あらすじ】

日々をまったり生きてる普通の彼女が、何を間違ったのかうちはの彼に？ 性別不一致に悩みつつ（いや、悩むのか？）今度は必死に生きていく予定 ※処女作の為、生暖かい目をお願いします。ご作者の原作知識はぬるいです。外見BLになるかもしれません。ご注意ください。

1. 夢ならよかった

深い微睡みに包まれていた”私”の意識が、ゆっくりと浮上してくるのを感じる。

……そういえば今日って仕事なのかな……あれの仕上げる期限っていつだっけ……

またあの怖いおっさんの話聞かなきゃいけないのか……

……冷蔵庫のプリン忘れてた……まあそのうち……あ、賞味期限切れてないかな？

ああ……もっと好きな服着ていけたらなあ……

どうにもさだまらない思考と格闘することを早々に放棄し、ゆっくりと目を開く。

しかし、周囲は霧でとざされているかのようで、視界はあてにならない。

ぼんやりと何かが見えるような気もしないでもないが。

霧？ 霧といえば山道か……あれ？ 最近自然と触れ合っていないはずだけど。

これ以上暗くならないうちに帰らないと帰れなくなっちゃうな。

うーんなんだか体がうまく動かせないなあ。

ああ、もしかしてあれか。もしかしなくても夢の中だね？

夢の中で意識保ちつつ、自由に夢を操る練習とかしたなあ……ちつとも自由になんてならないけれども。

やっぱりここは飛ぶべきでしょ。あんまり頑張ると目覚めちゃうけどね？

飛ぶってどうやるんだっけ。メ○ヴェがあればいいんだけど。ヴェオンっバシュってね。

今日は羽もついてないしなあ……

よしっここは気合で……よっ！ ほりゃっ！ といやっ！

うう……ダメだ……やっぱり自由になんてならない。

なんだか意識もぼーっとしてきたみたいだし。

もうちょつと微睡んでもいいよね？ 目覚ましあるし。

どうにもままならない夢を放棄し、もう一度”私”は意識を手放した。



最近めっきりご無沙汰している早朝の田舎の空気に触れ、”私”の意識が浮上してくるのを感じる。

この、緑豊かな大地を思わせる空気は結構好きだったりする。

社会に出てからずっとエアコン快適生活だしね。外は空気悪いし。

目覚ましが鳴った記憶は無いので、少し早く起きすぎたかと思いつつ、ゆっくりと目を開ける。

そこには見慣れ……ない木造の天井が広がっていた。

遠い記憶にある旅館や実家のそれに似ていなくもない。

だが、あきらかに自宅のマンションではない。

軽くめまいを感じつつ、状況を把握する為、体を起こそうとするが、そんな意思とは別に、体は一向に動かない。

そんなはずは無いと思いひとしきり身動きし、助けを求めるかのように出した手が視界に入ってきた。

「……あう？……あうえ！！？？？」

なんぞこれえええ！！！！

なんでこんなちっちゃな手があるの！？

軽く握り潰せそうじゃないかつ いやいや潰してどうする！

っていうかありえないって、ありえないってばっ 私子供産んだ記憶無いよ！？ 悲しいことにね……？

あっこれ私の手か……にぎにぎしたらちゃんと動いてるわ

いや、それよりあれだ 助けてっ！ 誰かつ！ おにいちちゃんっ！！

1. 夢ならよかった（後書き）

ドストライクの小説が見つからないなら、書けばいいじゃない。
ってことで、見きり発車しました。

初心者なので、詰めきれてない可能性があります。
読みにくい、解りづらい等あると思います。

ご意見よろしくお願いします。（ガラスハートですので、お手柔らかに…）

2. 現状を見つめる勇気をクダサイ

おはようございます。”私”です。

あれから幾度となく起きてはうちのめさを繰り返し、やっと現状を見つめることにしました。

最初の頃のように、無邪気に夢だと思ったかった……

それはそうと”私”ですが、どうやら記憶がはつきりしません。

そこそこ真面目に仕事してたことや、3……29歳だったこと——いい子は突っ込んで聞いちゃダメよ？——などは覚えているのですが、肝心の名前が思い出せません。

”私”の核となるべき大事な名前……

それが無いだけで、どうにも”私”という存在が不安定に思えてしまいます。

まあ思うだけで、ここにしっかり存在しているわけですが。

いや、もしかして”私”がこの思考を”私”と認識しているだけで、”私”なんて存在しない……？

ああ、何か閃いた気がしたけど、さっぱり意味不明だわ……

とんでも設定とか本気で困るよ？ まったり平和に日々を過ごしたいんだから。

さて、このやけに縮んだ体……

誰しも経験があると思いますが、今までの人生で、何度となく、昔に戻ってやり直したいと思っていました。

ですが、残念ながら今は過去ではないようです。

それというのも、どうもこの体、男のようなのですよ……

ありえない所にささやかな、しかし確かな違和感があるからね。

慣れるしかないのですが、はたして慣れることは出来るのです

ようか？

うーん、どうも無理な気がしないでもない。

だってねえ、今まで30年いじよ……近くも、女の体だったんだよ？

この違和感は筆舌に尽くし難いものがあるよね。

子供の体だったのが、まだ救いになるのかな……

なんせ、体がちっちゃいという違和感のほうが大きいからね。

どっちにしても、時間をかけて慣れていくしかない……か……

”私”の家族ですが、もうずいぶんと顔を見ていない両親と、おにいちゃんがいきました。

ここに来る直前のことは、まだまだ全然思い出せませんが、たぶんずっと連絡すらとってなかったと思います。

仲が悪いわけではないけど、どうやら単純に”私”がものぐさだった模様。

実家もかなり田舎にあり、帰るのも一苦労だったから、結局何年も帰らずじまいだったのよね。

こんなことならせめて正月くらい帰ればよかったなあ……

せめて電話くらいしてあげればよかったか……

……。

……。

……あ、あぶないあぶない沈みそうになったによ……

気を取り直してっと、そうそう、こちらでも両親とおにいちゃんがいるようです。

おにいちちゃんと言いつつも、非常に庇護欲をそそられるのよね。
あの子は私が守ってあげるのだっ！ てね？

まあ、さすがに10歳にもならない子をおにいちちゃんとは思えないしね？

とりとめもない現実逃避を実施していると、部屋の外で人の気配が近付くを感じた。

最近やっと馴染んだ視界を向けると、細く開けた入り口からそつとこちらをうかがう彼をとらえた。

子育てなんて経験無いからよくわからないが、だいたい4〜5歳くらいだろうか？

うらやましいほど綺麗な黒髪が、サラサラとゆれている。

幼い子供特有の丸みがとれてきた顔は、見飽きることのないととのいっぷり。

うん、やっぱり何度見ても見惚れるわ／＼／

この子のたまに見せる笑顔がたまらなく可愛いんだよふふっ

お兄ちゃんであろうと頑張るのもまたいじらしいのよねえ

こんな弟がいたら、男女問わずよってくる悪い虫との、昼夜問わずの激しい防衛戦が繰り広げられるんだろうなあ

むむっ、これからそうなる可能性もある……のか……？ ちよつと

頑張らなきゃ！？

「あつ、おはようサスケ。よかった、起きてたんだね？

今日もいい天気だよ。お散歩行こうか？」

そう、目下最大の悩みはこれなんですよ。

”私”がサスケとか無理すぎるWWW

サスケと言えば、変態に熱愛されたり、呪印プレイ強要されたり、なんだかんだと死亡フラグ満載な彼ですよね？
ちよっとオタクな両親が、好きなキャラ名を子供に名付けた……とかなんとか、色々考えて見たものの、現実がことごとく否定してくれました。

「あうあ……」

ああ……生きていけるのかな……”私”……

「つとその前に、新しいのにしとこうか。」

えっ？　ちよっと待って！　心の準備がつー！

「んあつあうあ！　んうああうあ！」

やめてっそんなおもむろに脱がさないでええ！

あっちよまつ……

……っふぐ……うつ……こんな可愛い子にアレの世話とか……

ぐすっ……せめてお母様にマカセテクダサイ……うつもうお嫁にいけない……

2. 現状を見つめる勇気をクダサイ（後書き）

やっとタイトルの彼が誰か判明。

いや、別に引つ張るつもりは無かったんですよ？

おかしいなあ…

3. 赤ちゃんのお仕事

赤ちゃんなんて寝てるだけだから、暇だね？

そう思う時期もありました。

なんせ、”私”が赤ちゃんだった頃の記憶なんて、遠い記憶の彼方

……

というか、記憶にすら無い頃だしね。

そういえば最初の記憶って何だろう……結構人間の記憶っていいかげんなものだよね？

時系列もバラバラだし、思い込みという名の捏造なんてし放題。

何が言いたいのかというと、小さい頃の記憶なんてあてにならない
つと。

思考がズレたかな。もどしもどし。

さて、実際赤ちゃんをやっているわけですが。

これが意外と大変でした。

誰よ暇とか言った人はっ！ 出てきてそこに正座しなさい！

……えっと。

まずこの体、かなり燃費が悪い？ というかすぐお腹がすくのよね。

あと、やたらと睡魔が襲ってくるようで、”私”の意識を保つのが結構大変です。

自分のことを自分で出来ないストレスとの格闘も、かなりのものが

……

あっ……涙が……うぐっ……

なにはともあれ、体の掌握は急務よね？

ただのほほんと、ころころしつっ寝てるだけでは無いんですよ。

それこそ体の動かし方なんて知ってるわけですから、必死になってあばれてみたり。

長時間の正座の後、足が痺れてままならない状態で歩くくらい、体
が思うように動かないけどね。

こちらでのおにいさん——イタチ君という名前の方ですよ——が、
素敵な笑顔で相手してくれるから癒されるわあゝ
抱きしめてあの艶やかな黒髪をなでなでしたいなあ……

……はっ……べっべつに特殊な趣味ってわけじゃないんだからねっ
！？

”私”はしっかり大人な男性しか……って誰に言い訳してるんだろ
……

その笑顔に向かって、全力ではいいいを披露しつつ、だいぶ行動範
囲が広がったことを実感します。

歩くのって結構難しかったんだね……人間ってすごいわあ……

それにしても、赤ちゃんの体の成長っぷりには驚かされます。

目に見えて動きやすさが変わるもんね？

これなら、ものぐさな”私”も飽きないかも。

疲労が溜まってきたら、発声練習に移ります。

喋ることなんてあたりまえすぎて、練習なんて思ってもなかったの
ですが、チョコに蜂蜜掛けた以上に甘かったです。

よく考えたらと言うか、よく考えなくてもそうだよねえ。

言葉を知ってても、声帯が出来上がってないのか、うまく操れないみたいだし。

意外と舌もうごかないもんだしね？

イタチ君とか他の人がいる時は、「あー」とか「きゃー」とか「んにゃー」とか。

とにかく子供らしく、間違っても言葉にならないように、声を出す練習をしています。

赤ちゃんってどれくらいから喋れるのかな……

本当は早く会話がしたいんだけどね……

今も以前も、”私”の近くに子供ってほとんど見かけなかったからなあ。

ちょっと遠くの友達の所には出来たんだっけ……ああ、めんどくさがらずに会いに行っとけばよかったかな。

これ間違うと、異端視されかねないよね……たぶん。

「赤ちゃんっていつから喋れるの？」なんて聞くわけにもいかななし。

うう、悩みが増えるっぽうだわ。

一人の時には、心置きなく喋る練習が出来ます。

と言っても、一人でぶつくさ危ない人みたいなことはしませんよ？

「あー、えー、いー、うー……」

ってどっかでよく聞く練習を、小声で、ばれないようにやっています。んむ、意外と力行が難しい……こんなしょっぱなで壁があるとは……

この世界特有のチャクラというものについても、色々と試行錯誤してみました。

”私”のおにちゃんの部屋で見た、原作のおぼろげな記憶から、体と精神から生み出すとかなんとか。

かなり昔、心臓から左手、左足、右足……と、意識を巡回させる練習とかしたなあ……

鏡があれば力が増幅される……なんて某ナルみたいなことは無いんだけどね？

……葬りたい過去は埋めてしまおう。そうしよう。

体のほうは、なんとなくこれかな？　　って思う、力の存在を意識することが出来た。

赤ちゃんなので、その力の大部分は成長にまわってる……のかな？
子供の成長速度ってすごいからねえ。現在実地体験中だし。

さて、精神……精神か……

これってどういうものなんだろうか……？

単純に経験？　それとも精神的な強さ？　はたまたまったく別の何か？

経験なら、一応30年近く生きてるから、それなりにあると思うんだけど。

精神的な強さなら……たぶんきつとこの世界の人よりは貧弱なんだろうねえ。

だってかなり平和でのほほんと生活してた、現代日本人だよ？

打たれ弱い自信だけはあるよ？　あ、でも一応社会でそれなりに打たれてきたか……

まあ、忍びになれば殺人なんて日常？　な、この世界の人と比べるのが間違ってると思うな。うん。

別の何かだった場合……うゝんさっぱり想定出来ない。

習うより慣れろとか言うけど、チャクラの概念が無い”私”の凝り固まった意識には、なかなか難しいことかもしれない。

あうゝ煮詰まった思考はカラダにいくないっ！

こういう時はイタチ君の笑顔に癒されよう。そうしよう。

一人で部屋を抜け出したら、追いかけて来てくれるかな？　ふふっ
ついでに適当な本でも無いかなあ……最近活字にウエテルカラネ？

3. 赤ちゃんのお仕事（後書き）

赤ちゃんも大変なんだよ！

と言いつつイタチさんの笑顔にどっぷりハマってるといってお話

4. 弟が出来ました。

緑が濃くなり太陽が勢力を増す季節、ボクに弟が出来ました。赤ちゃんを間近で見るのは初めてですが、へたに触れば壊れそうなほど小さいです。

最初はどうやって接していいか迷いましたが、おそろおそろ伸ばした手に、暴れることなく抱かれてくれました。

そのまますぐに眠っちゃいましたけどね？　ちよつと残念です。

弟は時々、真剣な目で、どこかを見つめていることがあります。その視線の先には、特に何があるというわけでは無いのですが。ボク達がそばにいる時には、そんな素振りはありません。

赤ちゃんっていったい何を考えているのでしょうか？

その透き通るような目からは、なかなか判断出来ません。

ただ寂しかったのかな？　なるべく傍にいたいと思います。

起きている時は、大抵体を動かしているようです。

その小さい手足をめいっぱい使い、部屋の中を動きまわっています。体を動かすことが大好きなのかな？

でも、変な所に行こうとはしないし、危ないこともやらないし……もちろん、危険物なんて排除済みですが。

母さんには、手のかからない子だって言われていました。

他の子を知らないので、ボクには判断出来ません。

ですが、時々こちらの言葉を理解しているような素振りを見せます。

やっぱり、ボクの弟はすごいのかもしれない。

「サスケ、ほら、こっちにおいで？」

そう言うのと、弟は満面の笑みを浮かべて、一生懸命近付いてきます。そのままボクに、よじ登るかのように抱きついてくるのが、たまらなく可愛いです。

ああ、たぶん今、壮絶に頬が緩んでいるんだろうな。

そのぷにぷにのほっぺを、心行く迄堪能出来る幸せを噛みしめつつ……

そんなある日、部屋で大人しく寝てると思っていた弟が、行方不明になりました。

ボクが外出している間に……この時は本気で心臓が止まるかと……昼間っから屋敷に侵入する者なんていないだろうし、大事なとは思っていましたが。

心配するなというほうが無理ですよ？

あんな可愛い弟を見たら、連れて行きたいと思わない人なんていないでしょう。

結論から言うと、ボクの部屋で本に埋まって寝ているのを発見しました。

どこにも怪我が無さそうで、本当に良かった……

まだ文字なんて読めないだろうに、何か面白い絵でも見つけたのかな？

今度から、色々見せてみようかな。

それにしても、一人でここまで来れるなんて、すごいなあサスケは。

いつものように、弟の相手をしている時、ふとこちらの会話が理解出来ているのでは？　と思う。

父さんとの会話に耳を澄ませるような雰囲気だったり、語りかけた言葉に、タイミングよく声を上げたり。

その瞳には、しっかりとした知性が宿っているような気が……いや、気のせいだろうか？

これが俗に言う兄バカと言うものだろうか……バカはいやだな。今度誰かに相談してみよう。

しかし、声は出ているのだから、教えればしゃべれるんじゃないだろうか？

「サスケ、いいかい？　おにいちゃんって言ってごらん。

お・に・い・ちゃん　だよ？」

「あうう、むう……うにーい……んぶう」

「頑張れ、もう一度、おにいちゃんって。

……やっぱりダメなのかな……？」

「むう、んにゅー……にー……にーに……？」

「うっわ……今のそうだよね？」

父さん、母さん、サスケがしゃべったよ！」

「あら、すごいわねーサスケ。

ふふっ、イタチの愛が通じたのかしらね？」

「……パパとは言ってくれんのか？……パパとは……」

ああ、父さんがちよつと涙目になつてゐる……珍しいな。

4. 弟が出来ました。(後書き)

イタチさんには、早々に弟を好きになってもらいました。

全国一千万のイタチファンの皆様、こんなイタチさんで申し訳ない
あつ石投げないでっごめんなさいっ

5. 熱

……あつい……全身に力が入らないみたい……
あれ？ ”私”は何を……いや、ここどこだっけ？
どうにも思考が散漫となり、”私”を形作るのがうまくいかないな。
なんだっけ……歩き回れるようになったんだっけ……？
それにしては体が重い……

「――？」

ん？ だれかよんだ……？
なんとか薄く瞼を持ち上げること成功すると、心配そうに誰かが
覗き込んでいた。

おにいちちゃん……なんでここにいるの？
遠いのになわざわざ会いに来てくれたのかな。
……ってことは、”私”は倒れて入院でもしていたのかな？
日頃の偏った食生活がマズイのはわかってたのよ。
けど、ね？ 料理って一人分作るのめんどくさいじゃない？

……ゴメンね？ 心配させちゃって。
わざわざ来てくれて、ありがとう。
奥さんや子供はどうしたのかな？
久しぶりに甥っ子の顔が見たかったのになあ……

”私”もちよつと子供が欲しくなっちゃった。
なんでかって？
なんかね、ずいぶん長い夢を見てたみたいなんだ。
サラツヤ黒髪の可愛い男の子がいいな。

額にひんやりとした何かが乗せられるのを感じる。

あつ気持ちいい……

……あとで……起きれるようになったら……また……

そう思うと、”私”の意識が拡散していくのを感じた。

弟が倒れた。酷い高熱が続いている。

医者には、体は特に悪いところは無いようだと言われた。

精神的なストレスか何かから来ている熱だろうという話だった。

本当に大丈夫なんだろうか？ このまま目覚めなかったら……

最悪のことを想像しそうになり、胸が締め付けられる。

「サスケ？」

早く目覚めてほしい。大丈夫だと言ってほしい。

そう願いを込めて呼び掛けると、微かに瞼が揺れ動くのを捉えた。

うつすらと開かれたその瞼の奥に、まつげに隠れた瞳が見える。

焦点が合っていないその瞳は、吸い込まれそうなほど、深い色を浮かべていた。

その色を読み取ろうと覗き込むが、すぐに瞼が覆い隠した。

「おにいちゃ……。
……ごめん……」

何を謝る必要があるんだろう？

高熱に犯されるほどの何かを、この小さな体で抱え込んでいるのだから……？

ボクには話せない事なのだろうか……。いつか、話してくれるかな……

いや、今はそんな事より、早く良くなることを祈ろう。

すでに効果を成していない額のタオルを替える。

僅かに目尻に浮かぶ涙を、親指の腹でそっと拭う。

そうすると、微かに微笑んだような気がした……



あれから程なく、”私”の意識も完全回復しました。

聞いたところによると、心因性の熱だったようで……

うーん、最近は自分のことも自分で出来るし、かなりストレスは軽減してるはずんだけど？

ちよつと”私”向けの娯楽が少なくなろとは思っけど、そんなことじゃないよね。

思い当たるとすれば……”私”の存在そのものが、なんらかの負担を体を与えてた……くらいかな。

この1年ちよつとの積もりに積もった負担が一気に噴出したとか？でも、こればかりはどうしようもないよね……”私”は”私”として、しっかりここにいるわけだし。

単純に体に無茶させてた線も捨てきれないけどねえ。

望郷の念に駆られたから……つてのも、倒れる前だと無いかなあ。思い通りに動けるように、体鍛えるのに必死だったから。

余計な事は、あえて考えないようにしてたのよね。

……どっちかというと、今のほうがひどいかも。

なんだかおにいちやんに会ったような気がするのよね……気のせいだろうけど……

よく考えてみると、未だに最後の時が思い出せないのよね。

何かの事故とか、病気とか、明確にはっきりと終わった自覚があればまた違うんだろうけど。

もしかしたら、あっちの体もちゃんと生きてるのかもしれないじゃない？

精神だけ迷子になってるとか。

でも、そうなるここに、”私”と”サスケ”がいるべきなような……。

ああ、なんだか沈んでいくのがわかるわ……

ちよつとこれは、自分ではどうしようもないかなあ。

……ほっとけば、そのうちなんとかなる。かな？

”私”が元気無いせいか、イタチ君が頻繁に外に連れ出してくれる

ようになりました。

心配かけて申し訳ない気持ちを抱きつつ、体鍛える絶好の機会なので、目一杯走ったり。

こうやってちょこちょこ出歩いていると、そのうち一人でお散歩行くのも違和感無くなるかなあ？

たまにね、ふと視線を感じてイタチ君を見上げた時とか、なんとも表現しがたい目で見てる時があるのよね。

何か言いたいことでもあるのかな？

悩み事ならお姉さんが聞いてあげるよ……？

「にいちや？ なあに？」

「ん？ サスケは今日も元気だねーって思ってたんだよ。

あ、お土産にオヤツ買っていいこうか」

おっやつうー！ すっういーつつ！ ああイタチ君ありがとう！

仕方ないから騙されときますよ？

けっして甘味処にツラレタわけじゃないよ？

5. 熱（後書き）

イタチさんが、”私”にとっての兄になるのはいつのことでしょう…

6. 出会い

清々しい朝の空気を、目一杯吸い込む。

昨夜は知らない間に雨でも降ったのか、昨日より空気がひんやりしている。

以前の体は、朝にめっぼう弱かったのに、今では早朝散歩が日課になった。

もちろん、いつもはイタチ君も一緒ですよ？

今日は、迎えに行くから先に行っておいでとのこと。

ここ一年ほどは、体力作りや、体の動かし方に重点を置いている。本格的な武術っぽい何かは、もっと体が出来てからのほうがいいみたい。

軽くお遊び程度には教えてもらったけどね？

さすがにリーチが短すぎて、相手にならなかったわ。

それにしても、やればやるだけ動きやすくなるとか、子供ってすごいよねえ。

術のほうは……実は、以前イタチ君が色々読ませてくれたので、それなりに知ってたりする。

読めてるとは思ってないんだろうなあ　あれはきつと、絵本変わリだったんだろうねえ……

まあ、知っててもまだまだ使えないんだけどね？

あれです、何事も基礎訓練が重要ってことですよ。

あれこれ悩んでた例の精神だけど、結局わかりませんでした。

もう悩むのも疲れたので、よくゲームで見かけるMPでいいやって

ね？

そう思ったら、なんとなく把握出来たのがなんとも……”私”のあの悩みは何だったのかと……

やっぱり、自分が理解出来る概念に置き換えたほうが、噛み砕きやすいのかもしれないね。

思考しつつも足は動いていたようで、いつの間にか森の近くまで来ていた。

今日は一段と森の緑が濃い気がする。

いつもはこの辺で体を動かすのだが、今日は一人だからか、どうにもそんな気にならない。

せっかくなので、普段行かない方向へ、のんびりと散策することにした。

花卉に残った朝露がきらめいて綺麗だなあ……

たまにはこんなふうによろっと過ごすのもいいかもしれないよね。

ふと視線を巡らせると、低い茂みの向こう側で、男の人が一人佇んでいるのが目に入った。

こちらに背を向け、どこか遠くを見ているかのよう。

ちょっとした好奇心に押され、茂みの途切れ目から、彼を見つめる。

僅かに少年を残したまま、青年に変わろうとしている年齢かと思われた。

朝霧と共に消えてしまいそうな、その儚い立ち姿が、”私”を捉えて離さない。

このまま立ち去った方がいいのだろう。

しかし、どうにも体が動こうとしない。
視線を外すと、幻のように消えてしまうとも思っているのだろうか？

ふと、彼がこちらに意識を向けたのがわかった。
たぶんきつと、最初から気付いてはいたんだろうな。
立ち去ろうとしないのが、気になったのかもしれない。

彼の視線と、”私”のそれが絡み合う。
その瞬間、鼓動が跳ねあがるのがわかった。

”私”は、いま、どうして、このカラダなんだろう……

今まで感じたことのない、ひどい焦燥感に振り回されそうになる。
そう、あの人はきつと、”私”にとって……

「だいじょうぶ？」

どうやって声をかけようかと迷っていると、言葉が勝手にこぼれ落ちていた。

そつと近付き、両手をのばしてみる。

ああ、この体じゃ足にしか届かないよ……
なんとも言えないもどかしさが込み上げてきた。
もしかして”私”のほうが、泣きだしそうな顔をしているんじゃないだろうか？

「ありがとう。大丈夫だよ」

そう言って、彼はそっと抱き上げてくれた。

うわっと、役得？ 子供の特権！？

やばい、にやけそうだわ。子供らしい笑顔をしないと……にへらっ……これだろうか？

うん、大丈夫そうだ。彼もちょっと笑ってくれた。

先程までの焦燥感はなかったかのように、気持ちがふわふわしている。

まったく、”私”も大概げんきんなものだ……

「ぼくは、サスケ。うちはサスケ。きみは？」

「はたけカカシ。……よろしくね？」

「カカシくん。うん、よろしくね」

そう言って微笑むと、彼も柔らかに微笑み返してくれた。

彼の銀髪が、朝日に透けてキラキラと輝いている。

その揺れる輝きから、彼の瞳から、目が離せなくなる。

「ぼくが、そばにいるよ。だから、げんきだして？」

少しでも、その悲しみが癒されますように。

そう願いつつ、目尻にキスを落とした。

……うん、その鼻と口覆ったマスク、邪魔だよ？ w

「サスケ……何してるの？」

「あっ、にいちゃ……」

今まで聞いたどの声よりも、凍るような寒気を感じた気がするんだけど……

「えっとね、ぼくの、初めての、おともだちだよ？」

そう言って見上げる”私”に頷きを返し、彼はゆっくりと地面におろしてくれた。

どさくさ紛れのお友達認定は、なんだかうまくいったみたい？

「……にいちゃ？」

やましいことはこれっぽっちもないんだよ？ たぶんきつと……だから、ね？ その極寒の冷氣抑えてくださいっ

この後、帰宅するまで必死でなだめ、最終的にはほっぺにキスで落ち着いた……これで機嫌直るかな？

6. 出会い（後書き）

自分の語彙の貧弱っぷりに泣きそうです。
ちよっとでも何かがでればいいなあ

6. x それから

あれから数ヶ月、あの幼い子供とは、幾度かこの場所で会った。

特に何があるわけでもなく、碑があるだけのこの場所に、何が面白くて来るのか……

わざわざ、オレに会うためだけに来ているのだろうか？

だとすると、あの言葉は本気で受けとめないとな……。

あの子は、ここにいる時にはほとんど喋ろうとしない。

会話を振れば、たどたどしく話そうとはするが、それが必要最低限で終わる。

この場所の意味が理解できる年齢とも思えないが、周囲の空気からか、オレの雰囲気からか。何かを感じているのだろう。

……その沈黙が、正直ありがたい。ここで子供と遊ぶ気分にはなれない。

だが、最近は、ただそこにいるだけの、その姿に和むのも事実だ。

幼い子供特有の、少し高い体温に、なぜか安心感を覚える。

頭を撫でた時の、その無邪気な微笑みは、いつまでも見ていたくなる。

そう言えば、最初の出会いから不思議な子供だった。

大丈夫かと聞きながらも、何かにひどく傷ついているような。

慰めようと抱き上げると、逆にこちらが慰められたな……くすつまさかあんなふうに慰められるとはねえ。

カサッ

下草を踏みしめる音が響いた。

今日は、過去に想いを馳せる前に、あの子が来たようだ。

振り向くと、碑を見つめる姿が目に入る。

どこか透明感のあるその瞳の奥で、いったい何を考えているのだろうか？

オレが見ていることに気付き、いつものように近くまで来て佇む。
このままこの穏やかな沈黙を楽しむのもいいが……

「サスケ、今日は時間があるけど、どこか行きたい所はあるかい？」

たまにはゆつくりと話をしてみるのもいいかもしれない。
この、どこか謎めいた存在を知りたい欲求に駆られる。

「んっど……このさどが、みわたせるところに、いきたいかも？」

「ちょっと遠くなるけど、大丈夫かな？」

ああ、お兄さんは今日は迎えに来るのかな。言っておかないと、
行き違いになるね」

「じゃあ、うちによってから、つれてってください」

「了解。じゃー行こうか」

その小さな手を繋ぎ、ゆっくりと歩き出す。
ま、たまにはこういうのもいいんじゃないかな？

「ねえカカシくん。このさとの、たてものって、おもしろいね。し
ゆるいが色々、いっぱいまざってる」

また面白いことを言うねえ。普通はそんな事思わないとおもうよ？

カカシ君と出会ってから、ちょこちょこ慰霊碑まで行くようになった。
た。

まあ、行ってもいないことが多いんだけどね。

それでも、カカシ君と会える場所が他に思いつかないんだから仕方
ない。

なんたって、”私”とカカシ君の接点なんて、今の時期はほとんど
無いもんね。

たまには会って、印象付けとかないと、こんなちっこい子なんてす
ぐ忘れちゃうよね？

ほんと、なんで”私”は子供なんだろうか……

いつものように、慰霊碑のある広場に行くと、今日はカカシ君に会
えた。

相変わらず複雑な顔して立ってるなあ。

”私”の知り合いは、幸いなことに、まだここに刻まれてないけど。

出来れば、今後も、誰も刻まれないといいんだけど……
たぶんきつと、夢で終わるんだろうな……。

いつもは、イタチ君が迎えに来るか、カカシ君が家まで送ってくれるんだけど、どうやら今日は一緒にお出かけが出来るみたいですょ？
せっかくなので、里が一望してみたいと言ってみました。

なんだか無駄にテンション上がって、色々話したような気もするけど。

はしゃぎすぎたのか、景色を堪能する頃には、疲れ果てちゃって……
結局だっこされて帰って来ました／＼／

もう、今日の思い出は全部吹っ飛んじやったよ。強烈過ぎます。ち
っちゃくてよかった!？

6. x それから（後書き）

カカシさんには、どこに行けば会えるんでしょうね？
あとは病院の印象ぐらいしか。。。

7. 日向事件 1

トスッ トスッ――

静寂な森に、何かが刺さる音が響く。

「ふう……」

もう何時間になるだろうか。

男の子が一人、小振りなクナイをひたすら投げ続けている。

「さすがに、つかれた、なっと」

最後の一本を投げ終わる。

手元のクナイが無くなったことから、休憩に入るようだ。

うーん、結構命中率は上がってきたかなあ。

やっぱり昔やったダーツと全然飛び方が違うね。こっちのほうが楽しいかも？

ちょっと左手でも投げれたらカッコイイかなあ？

それにしても、拾いに行くのがめんどくさいよね……

的外して森の奥にまで行っちゃうと、見つからないこともあるしね。むう……引き寄せたり出来ないものかなあ？

運動した後の熱を冷ましつつ、ふらふらと思考を彷徨わせる。

そうこうしていると、背後から聴き慣れた足音が近付いてきた。

「サスケ？ そろそろ終わりかな？ 母さんに頼まれた物買って帰ろうか。」

「そういえば色々と気の早い屋台が出てたよ」

あれ？ こっちってお祭りなんてあったっけ……？

「ん、今日って何かあるの？」

「ああ、サスケには言っけなかったかな？

長らく緊張状態だった雲隠れの里とね、同盟を組むんだよ。その代表が、そろそろ里入りするんじゃないかな？」

……同盟……なんだろう、何かが引つかかる。

同盟って砂とじゃなかった？ いやいや、それはもっと後だっけ。他に同盟組んでたんだ……こんなちっちゃい頃に。

……ん、ちっちゃい頃……？ あっ、ひなた誘拐事件っ！？

あれって確か、どっかとの同盟イベントで起きたんじゃないかってっけ？

ひなたがちっちゃい頃に、誘拐されかけたとか覚えてないけど。確か当日じゃなかったとは思っけ……ああ、思い出せない。

”私”が知ってる結果になるとは限らないし、もしかしたらひなたが……

うあ……どうしよう……

”私”一人じゃ止められないし。いや、そもそも止められるほど強くないし。

誰かにお願いするしかないか。”私”がお願い出来る相手なんて、限られてるけど。

「兄さん、聞いてほしいことがあるんだ」

「なんだい？ あらたまッて」

そう言うと、サスケは思案気な表情で軽く俯く。

でも、相手は成功させる為に、かなり強い人が来るよね。怪我しない保証なんて無い。

手を出さなくても、ひなたは生き残る可能性が高い……いや、でも。ここで話しか無いと、”私”が後悔する。うん、非常に利己的だけれどね。わかってる。

……ゴメンねイタチ君。キミに頼ることしか出来なくて。

「その雲隠れの里？　って、信用できるの？」

これってさ、他里に無傷で最強部隊を送り込む、絶好の機会にならない？」

「……送り込めたとして、同盟を組む直前だ。人数も限られてる。どうにも出来ないよ？」

それとも、サスケには何か見えてるのかな？」

面白いことを言う。イタチは熟考しているサスケをじっと見つめる。

そんな視線に気付かず、思考に没頭する。

答えがわかってるだけに、そこに辿り着く話をうまく作り上げるのが、結構難解な作業となった。

「まず、精鋭とはいえ、少人数での戦争は難しいと思う。火影様暗殺を狙うことも無いかもしれない。さすがに、上の警護はしっかりしてるだろうしね。……でも、何かを盗むことは可能じゃないかなって思うんだ。

ねえ兄さん。写輪眼って強くて貴重なんだよね？　もちろん日向の白眼も。それこそ喉から手が出るほど……

今、木ノ葉の里の中はさ、ちょっと浮かれすぎてると思うんだ。同盟自体はおめでたいからいいんだけど」

それを聞いたイタチは、いつになく真剣な表情となる。

これはほんとにあのサスケだろうか？　いつもは柔らかな雰囲気に含まれているというのに。

普段よりやけに大人びて見える。

そう言えば、今までも稀にこういう雰囲気を見せていたか……

「サスケ、きみは……いや、そうだね。可能性はあるな。」

大人を拉致するのは難しいけど、前線に出る前の子供なら……

これは、ボク一人の手には余るかな。仕方ない、あの人を巻き込もう」

「なにも起きなかったら、ぼくが怒られるだけだよな？」

「大丈夫。その時は一緒に怒られてあげるよ。」

サスケは今回の件、大人しくしているんだよ？」

「……うん。ぼくもお手伝いしたいけど、自分が出ることは限られてるって知ってるから。」

兄さん、気をつけてね？」

大丈夫と言いつつ、サスケの黒髪をかき乱す。

イタチ君……”私”も頭撫でたいんだけどなあ？

言うだけは言ったし、あとは無事に終わることを祈るしか無いか。

もっと”私”に力があれば、お手伝い出来たのに……

今のまま動くと、”私”がターゲットになるかもしれないしね。

出来ることの見極めは、間違えないようにしないと。



とある評判の良い甘味処。そこには、結構長い時間悩んでいる人影が一人。

その外見は、いかにも怪しく、この店にはそぐわない。

「カカシさん……何をしているんですか？」

「うん？ ああ、ちょうど良かった。今日は新作が二個もあるんだよ。この抹茶風味のとか、美味しそうだと思わないかい？ でも、もう一個も捨てがたいんだよねえ。」

あの子はどっちが好きだと思う？」

「……両方持っていけば喜ぶんじゃないですか？ それより、お話があるんですが」

「ちょっと待ってて、場所変えよう」

そう言うのと、先程から見つめていた菓子を買うため、いそいそと店の奥へと消えていった。

カカシの家が近かったため、場所を移してサスケの考えを伝える。男の一人暮らしなのに、意外と綺麗にしているようだ。

「そう、あの子がそんな事をね……」

わかった。上には注意を促しとくよ。なんせ、今回の同盟の意図が読めないからね。厄介ごとは勘弁してほしいよねーほんと」

そう言って、手の中の湯呑みを弄ぶ。

「彼らの帰る直前が危険でしょうね。素直に帰ると告げている日に

帰る保証はありませんが。

しっかり監視して下さいね？ サスケも狙われている可能性があるんですから」

「……キミも十分候補なんじゃないの？」

「サスケの所に行かれるより、私の所に来る方がましです。

……守ってくださいね？ 期待しますよ」

そう言って意味ありげに微笑みかけた。

イタチ君が怪我すると、あの子が泣くからね……ほんと怖い笑顔だよ。

7. 日向事件 1 (後書き)

色々悩んで難産でした。

書きたかったのは甘味処のくだりですがW
日向事件って結局いつなんでしょうか？

イタチさんへの説明開始のくだりを修正

8. 日向事件 2

その日、木の葉の里は朝から賑わっていた。
里の人々は、同盟締結というこの良き日を祝して、思いおもいに楽しんでる。

大通りに目を向けると、左右に並ぶ大勢の忍達。
どこからともなく、微かに紙吹雪も舞っているのが見える。
さすがにこちらは緊張を隠せない模様。

彼らに好奇の目を向けられているのは、通りの中心を歩く一人の男性。
性。

その堂々とした体躯を晒し、軽く手を降りつつ歩みを進める。

周囲の大人達に視界を遮られながらも、”私”は観察を続けた。

あれが雲の代表か……片目を隠しているのは、カカシ君と一緒にだね。
まあ、人相はかなり悪く見えるかなあ。髭面だし？
うーん、ちょっと怖いかも……先入観のせいかな？

後ろの二人は、優しそうな表情をしてる。

どこにでもいそうな顔立ちだなあ……人混みに紛れたら、違和感無く溶け込みそう。

優しそうだからと言って、甘く見ないようにしないとね。

通りを歩いていた彼らが視界から消え、程なくして、左右に並んでいた人々も散会する。

あとは、会場で調印が終わるのを待つのみとなった。

「さて、ボクらは中に入れないから帰ろうか。

サスケ、わかってるよね？」

「うん、兄さん。気を付けるよ。あ、帰る前にちょっとだけ寄り道してもいいかな？」

昨日カカシくんが持ってきてくれたおやつ、美味しかったんだあ、
今度は兄さんと食べようと思って。どうかな？」

今日からの数日間に思いを馳せつつも、おやつは別だよねと一人思うのだった。

あたりが闇に沈み、日付が変わろうとする頃。

昼間の晴天が嘘のように、薄く広がった雲に月が隠される。

他より僅かに高い建物の影、その周囲の闇よりなお暗い影で、微かに身動く者達がいた。

程なくしてもう一人、その影に近付く者がいる。

「ちっ……やけに警備が嚴重だな。昼間は浮かれていたのによ」

「監視の目を誤魔化すのにも、手間がかかりましたしね」

「このまま進めるか？」

「いや、そうだな……」

何事か囁き、頷くのを確認すると、彼らは僅かな痕跡も残さず、その場を立ち去った。

コトツ――

静かな室内に、僅かな音が響いた気がした。
睡魔に侵されていた”私”の意識が、ゆっくりと浮上する。

イタチ君が帰ってきたのかな？

ひなたは大丈夫だったかな？

うん、帰ってきたってことは、大丈夫だったってことも。

もしかしたら、今日は事件が起きなかったのか？

これは相談して正解だったっぽいかな。よかったあ。

「兄さん？

おかえりなさい？」

寝起きの思考を引きずり、眠気を宿した目を瞬きつつ、部屋の入り口を引き開ける。

その目に飛び込んできたのは、想定より大きな人影が一人。
マスクに覆われた顔からは、表情を一切覗うことが出来ない。

徐ろに伸ばされる手を認識し、急激に警鐘が鳴らされるのを感じる。

……まずいっ！

思ったと同時に、後ろに飛び退る。

だが、先程までの睡魔が邪魔をし、僅かに動作が遅れた。

その隙を逃さないかのように、人影から何かの力を感じた。

何をされた……？

外傷は特に無いようだけど。

隠し持っていたクナイを引き抜き、相手に向ける。

視線を相手から逸らさず、時間稼ぎを模索するも、徐々に”私”の意識が薄れていく。

……ああ、ダメだ。無防備に受け過ぎた……これは落ちるかも……
ごめんなさい、ふたりとも……

人を眠らせる術か何かだろうか。

程なくして、抵抗むなく、”私”の意識が闇に沈むのがわかった。

その意思の消え行く瞳には、雲の隙間から覗く月と、その月光に照らされる銀色が写っていた……

8. 日向事件 2（後書き）

難産その2。

着地点がどんどんズレていきます。おかしいなあ。

9. 日向事件 3

日向の屋敷方面に張った網に、奴等がかかった。

まさか、本当にあの子の読みが当たるとはね……

あっちの人間にも、それとなく情報を流しておいて正解だったな。

ヒアさんに情報源を探られなくてよかったよ。まさかあの子の名前を出すわけにはいかないからね。

それにしても、あの子はまだ三歳だったか……

改めて考えると、とてもじゃないが、歳相応には思えないな。

普段の何気ない仕草も、どこか落ち着きを感じる。

あの年齢は、もっとわがままで、手がかかるものではないのか？

そう言えば、言葉はどことなく選んでいるような節がある。

不意をつくと、本当のあの子が見える気がするが、本人は気付いて
いるだろうか？

ま、あれに気付いているのは、オレとイタチ君くらいなものでしょ。

あの子は、意外と交友範囲が狭いからね……

っと、まだまだ気を抜くには早いな。

さて、犯人の顔を拝みますか。

日向宋家の屋敷に着くと、庭の一角に僅かな人集りが出来ていた。

「こんばんわ、ヒアさん。襲撃があったとお聞きしましたが」

「ああ、キミか。情報感謝するよ。おかげでヒナタは無事だ」

「それで？ 侵入者は……あその一人だけですか？」

「そうだ。あそこに転がっているやつだけだ」

拘束されて、地面に転がされている侵入者を見つめる。

マスクで顔を覆っていたようだが、それもすでに剥ぎ取られている。それなりに抵抗したのか、血が目立つが、まだ息はあるようだ。

こいつは確か……例の忍頭のお供として来たやつか。

腕がたつとは思っていたが、まさか一人でやるとは。

その姿に、なぜか違和感を感じた。

……いや、あの子の話からすると、単独犯とは思わない方がいい。

それに、来るとしたら、あの忍頭だろう。

とすると……これは陽動か？

狙いはどっちだ？

嫌な胸騒ぎがする……

「犯人はこちらで引き取ります。よろしいですか？」

後方から、暗部の一人が声をかけてきた。

かなり助かった。オレには事後処理をしている余裕が持てない。

「すまない。任せるよ。死なせない様にね。」

ヒアシさんも、それでよろしいですね？」

「そうだな、特に問題は無い」

「これで終わりとは限りません。引き続き警戒お願いしますよ。

オレは、うちはを見えます」

そう言い捨てると、焦る気持ちを抑えつつ、全力でうちはに向かった。

民家の屋根を伝いながら、最短距離で突き進む。

やつらは三人で里に来ていた。

一人が日向で陽動に動いた。残るは二人か。

警戒が厳しくなった日向を狙うか、それとも……サスケ、無事でいてくれっ

うちはの屋敷が見えてきた。その周囲を取り囲む塀に立ち、中の様子を見ろ。

警備が若干薄い気がした。ここに来るまで、イタチ君に会っていない。

……いったい何があった？

サスケの無事を確認する為、部屋の場合へ移動する。

その部屋の前に佇む、不審な人影が目に見え込む。

それと同時に、崩れ落ちるサスケと視線が絡んだ。

くっ……間に合えっ！

最大限に殺気を込め、二人の間にクナイを投擲する。どうてき

弾かれたように飛び退る敵を睨みつつ、サスケを背後にかばうことに成功する。

そのまま視線を逸らさず、サスケの状態を探る。

外傷は無いようだ。呼気にも不自然さは無い。眠らされたか……？

「このままサスケを拉致するのを、黙って見てると思いますか？
雲の忍頭さん」

そう言って、おもむろに左目にかかる額当てをずらす。
そこからは、紋様の浮かんだ真っ赤な目が覗く。

「ちっ……おまえは……」

僅かに敵の気配が乱れるのを感じた。

やつもそこまで馬鹿じゃないはず。一瞬で決着のつく相手なら、殺して拉致遂行もありえるが。

殺人が任務ではないのだ。拉致なんて、対象を確保する前に発覚した時点で、失敗が目に見えている。

「……どこから漏れた？」

「ただの可能性の問題ですよ。あなた達は、力の収集に貪欲すぎた」
それにしても、開眼していないあの子を狙ったのが腑に落ちないな。
まさか、写輪眼自体ではなく、その血が狙いか……いやな話だ。気の長い話でもあるが。

「それより、時間はオレの味方ですよ？」

……それとも、一瞬でオレを排除してみますか？」

そう、秒単位で味方しているのだよ。

あとは、幻術で気を逸らせて……よし、かかったか。長くは持たないだろうが、十分だ。

ゴッ——

直後に、何かを殴りつけるような音と共に、敵が庭先に吹っ飛ぶのが見えた。

あとには、小柄な人影が一人。

あれは側頭部に綺麗に入ったな……やつの意識も飛んでるんじゃないか？

その振り上げた足を下ろし、転がった敵に駆け寄る。

そのまま印を組めないよう、無造作に右手、左手と潰さるぐつわしていく。

顔を覆うマスクを剥がし、その顔を確認すると、猿轡さるぐつわを噛ませて拘束する。

「ないすタイミング。イタチ君。

それにしても、あの子絡みは相変わらず容赦ないねえ」

「腕の立つ忍を拘束するんです。しかたないですよ」

ま、あつちは任せといって大丈夫か。
イタチ君が遅れた理由も想像が付く。ここには忍頭一人しかいないからな。

それよりもあの子は……

ふう、やっぱり外傷は無いな。よかった。

倒れた体を抱き起こし、その様子を伺う。

精神に作用する封印系の術か……そんなに強くないが。解――

程なくして、その手の中の体が身動ぎした。

「んっ……うっ……おにいちゃん……？」

……こんな安心しきった甘えた声は、初めて聞く。

その少しの遠慮も含まれない無防備な声に、心がざわつくのを感じる。

しかし、イタチ君をこんなふうに呼んでいるのを、聞いたことはないが。

この子はいつも、人に気を使い過ぎるからな。距離を感じるというか……

「……あつ、カカシくん……あいつは？」

先程までの危機を思い出したのか、その体が強張るのを感じた。

「もう大丈夫。今頃イタチ君に簀巻きにされてるんじゃないかな？」

そう言うと、安心したのか、少し体の力が抜けたようだ。

その瞳を見つめていると、視線が揺れ、潤んでくるのが見えた。

目尻の涙が、今にも零れ落ちそうだ。

男の子の涙を見るもんじゃないな。

オレの胸で悪いが……

そう思い、その小さな体を抱きしめる。

腕の中の体は、肩を震わせ、声を押し殺して静かに泣いていた……

9. 日向事件 3 (後書き)

戦闘描写？ナニソレ？オイシイノ？

はい、こんなですみません。

もっと私に中二神が降臨してくればっいやもうほんとごめんなさい

10. “私”と世界

おはようございます。”私”です。

例の日向事件は、誰も死ぬこと無く、朝を迎えたようです。

朝起きると、ちよつと心配そうな顔をしたイタチ君が教えてくれました。

犯人も捕えられ、上の人が雲との取引に使うことでしよう。

同盟締結直後ですから、どんな取引になるやら……まあ、私の耳には入らないのでしょうね。ちよつと残念です。

”私”としましては、今回の自分の発言が、ここまで歪みが生じるものだとは思っていませんでした……

ええ、色々認識が甘かったと申しましょうか。

イタチ君へは、写輪眼も危険だよって説明しましたが、”私”の中では、これはあくまで”日向事件”なわけでした……

どこかで、ヒナタさえ誘拐されなかったら、無事終わる話だと思ってたんです。

そう、本気でターゲットをサスケに変更するとはね。

これは”私”の知っている物語ではない。そう強く認識しました。

あの話は、あくまでも数ある可能性の一つを選び取り、描き出しているに過ぎないと。

世界は同じでも、”私”が存在する為に、選り取らなかった可能性に進むこともある。

もちろん、あの物語の通りに進むこともある。

今この世界は動いている。そういうものなのだと。
そして、”私”は今、この世界に生きている……

”私”を狙った意味……カカシ君がオブラートに包みに包んだ話を
イタチ君にしていました。その可能性もあるって話だったけど。
うん、ごめんね。聞いちゃった。

そういう意味なら、ヒナタよりサスケかもね。
三歳という年齢を考えると、うまくいくと洗脳できるおまけ付きだ
もんね？

こんな所で貞操の危機を感じるとはねっ！ なにそれこわいっ！
それ以前に、女の人をそういう相手には思えないと……いや、でも、
どうなのかな？

実際そうやってみないと、どうなるかなんて保証は無いか。
男の体はまだ正直わかんないし……そこまで成長してないしね？

それにしても、あの時はほんと怖かった。

男の人の手を、あそこまで怖いと思ったことは今まで無かったよ。

そして、躊躇なくクナイを向けている自分もね。

想像力が足りない子供じゃないんだ。あれはれっきとした武器なん
だ。

”私”も、知らない間にこの世界に馴染んできてたってこと、なの
かな……？

気が付いたら、しっかりカカシ君の腕の中だったわけだけど……
不意打ち過ぎて、思わず固まっちゃったけどね？
近いっ！ 近いよカカシ君っ！

あまりの近さに赤面しそうになるのを必死で抑えてたから、挙動不審になってなかったかな。

おまけにその胸で泣いちゃったし……安堵と羞恥と嬉しさと。ほんと色々抑えるのに必死でしたよ。

……ああもうっ今思い出しても恥ずかしすぎる／＼／＼くうっ……どうしてくれようかつ

……っと、若干思考が脱線したけども。

今回、”私”は結局守られた。

敵を退けることはもちろん、逃げることさえ出来なかった。

ただただ眠らされ、敵の手に落ちかけた……

この世界はそんなに優しい世界じゃない。”私”^{サスケ}の立場が、力無いことを許さない。

知ってはいたけど、理解してはいなかった。

そう、もっと力が欲しい。

誰よりも強くなくていい。

ただ、大好きな存在を守るだけの。

大好きな人が泣かないよう、自分を生かせるだけの力が……。

10. ";私";と世界(後書き)

9. 5くらいのお話

11. 友達を作ろう

あの幼児誘拐未遂事件からはや数日。

太陽は柔らかい光を投げ掛ける。

里の中は、何事もなかったかのように、穏やかな雰囲気をもとっている。

それもそのはず、あの事件は、極秘扱いとなっているのだから。

隣には、難しい顔をしつつ歩く弟がいる。

弟は、あの事件から少し変わったようだ。

気が付くと、今まで以上に考え込んでいる様子が伺える。

遊び……と言うより、あれは修行だな。それらにも、より積極的になった。

やはり、あの事件は、それだけ弟に傷をつけたのか……

先日、カカシさんに指摘されて改めて思ったが、弟の友達が少ないのが気にかかる。

確かに、弟が友達だと言っているのは、あの人以外に聞いたことがない。

さすがに年齢が離れすぎているとは思うが……

一応あの人も大人だ。弟の思いを無下にはすまい。

まあ、何かあった時には……ふふっ。それはその時考えようか。

今までにも、幾度か弟を連れて、子供達はいそうな場所に行ってみた。

だが、そのいずれの場合も、遊びに混ざろうとはしない。

ただの人見知り……と言うわけでも無さそうだ。

微笑ましそうに見ては、そのまま立ち去っている。

どうにも精神が早熟なようだ。

今向かっている家の子供達と、馴染んでくれればいいのだが。
あそこの家も特殊だから、悩みを同じくすることもあるだろう。

のんびり歩いて行くと、遠くに大きな屋敷が見えた。
今日行くことは伝えてあるはずだが、さて……

久しぶりに、イタチ君とまったりのんびりデートなのですよ
と言っても、メインはこのでっかい屋敷にご挨拶。

うちの屋敷も大きいけど、こっちも迷子になりそうなくらい広い
かも。

イタチ君が取り次ぎをお願いし、暫し庭を堪能する。
うん、いいねこういう庭。どこか懐かしい感じがする。
あの奥にあるのは、道場かな？ やっぱり道場もおっきそうだ。

「やあ、いらっしやい。先日はお互い災難だったね」

「突然の訪問すみません。お互い無事でよかったです。でも、その
話はここまでお願いします。」

サスケ、こっちにおいで」

あ、来たようだね。このちょっと厳つい人がヒアさんかな？
で、もう一人が、えっと……ヒザシさん……だったかな？

もう、双子だし名前も似てるし、わかんなくなるっ
ヒナタばばとネジばばでいいや。

「初めまして。うちはサスケです。よろしく願いします」

「そう、キミがサスケ君か。私は日向ヒアシだ。

娘と同年代くらいかな？ 仲良くしてやってくれ」

そう言うのと、隣に隠れるように立っていた女の子を促す。

「日向、ヒナタです。よっ……よろしく願いします」

うわぁ……かつ可愛い！ どうしようっ！ ちびっこいヒナタとか破壊力ありすぎじゃないですか！？

こう、撫で回したくなるねっ！ あ、危険な意味じゃないよ？でも落ち着け”私”。今は男の子なんだ。親の前でそんなことやっちゃダメ。

「可愛いねヒナタちゃん。よろしく」

笑顔を向けつつ、その頭にぽんと手を乗せ撫でると、真っ赤になってヒナタぱぱに隠れちゃった……あれ、おかしいなぁ……？

「ははっ、小さいのになかなかやるねえ。

うちの息子とも仲良くしてやってくれ」

「日向ネジです。よろしく」

おっとネジ君だ。

やっぱりあの事件が無事終わったから、大丈夫そうだね。よかったあゝ

「よろしく、ネジくん」

「ネジでいい」

「つと……」

えっとしまった、同世代にぼくってどうよ。そろそろ卒業しとくかな？

私……は、なんだか紛らわしいから、というか、色々微妙だから。素が出そうで怖いし。

残るはやっぱり俺……？

「……あ、ごめん。じゃー俺もサスケでいいよ。

ネジは、体動かすの好きなほう？」

「そうだね。よく父さんに手合わせしてもらってるよ」

うんうん、やっぱりネジ君に修行相手お願いしようかなあ。

そろそろ相手が欲しかったんだよねー一人だと煮詰まることもあるし。

イタチ君もカカシ君も、暇な人じゃないしねえ……

「じゃー今度俺ともやろうよ。あ、でも痛いのは勘弁してね？」

日向の屋敷からの帰り道、なんだか弟が嬉しそうだ。

あの、ネジという男の子が気に入ったらしい。

たぶん、修行相手になりそうだとでも思ったのだろう……まあ、そこから親しくなればいい。

それにしても、俺、か。ふふっ見栄を張っちゃって。可愛いなあ。

今日は連れて行ってよかったな。

だ
け
ど
……あ
の
頭
撫
で
る
癖
は
や
め
さ
せ
た
ほ
う
が
い
い
な
……

11. 友達を作ろう（後書き）

友達作らないなら無理にでも会わせてしまえん？
イタチさんご苦労様です。

12. 早く大きくなりたい？

麗らかな春の日差しが降り注ぎ、草木は色とりどりの華で我が身を飾る。

そんな縁側で微睡むのが似合いそうな、とある昼下がりに。

キラキラと輝く湖面を眺めつつ、その水面に一人足を乗せる。

こうしてここに足を運ぶのも、どれくらいになるのか。

こちらに来てそろそろ4年。だいぶ”私”の常識で推し量れないことにも慣れてきた。と思う。

現在行っているのは、あの話にあった、チャクラコントロールの修行の一つ。

足の裏からの、程良いチャクラの放出により、水面に立つことが出来る。

夢は夢のままで終わらないですよっ 夢は叶っちゃうものなんですよっ ……なんか違う？

まあ、まさか、ホントに実践出来ちゃう日が来るとは思わなかったけどね……びっくりだわ。

最初なんて、そのまま水泳に強制移行してたんだよねえ、あれは寒かったなあ。

夏なら泳ぐのもありなんだけど……もうちょっと季節選べば良かったかな……？

そうして、足元の水を一掬いし、チャクラを使い、手で弄ぶ。

指の隙間を抜け、手の甲を伝い、手首を一周し、指先に集まる。

水とは思えないほど弾力のある、ぷるぷるとした感触が気持ちいい。

そのまま手を持ち上げると、光を反射し、ゆらゆらと揺れる。

これもコントロールの一環……と言うか、まあ、単なる水遊びなんだけどね？

水ってなんだか触れていたくなるのよね。

ああ、癒されるわあ……。

木登りのほうは、以前からちょこちょこ試してたけど。

あれって、別に登らなくてもいいと思うんだ。

片足を幹に付け、微妙な感覚を把握する。それと共に、もう片方を地面から離して、体制を維持する。

まずはそこからだと思っただよねえ

なんでわざわざ登るのに固執するのかな？ あんまり登ると、失敗

した時危険なのにな。

いや、登るというより、歩くことに意味があるのかな。

まあいつか。もう済んだことだし。

心地良い疲労を感じてきた頃、水面から栈橋に上がる。

体を伸ばし、軽くストレッチを行い、一息つく。

程良く体が解れた所で、術の練習に入ろうとするが、ふと、思いついたことを試したくなった。

あの話で、ナルトがやってたお色気の術。

あれって、まったく違う人になってるわけじゃ無かったと思う。

自分をベースに成長させて、想像力を上乘せしてる感じかな？

ナルトのあの完璧な想像力は、いったいどこで身につけたんだろう

……
はっ、もしや覗き……？ いやまさかね。

この、思いついてしまった、早く大きくなりたいという誘惑には、正直勝てる気がしない。

うん、単純に成長するだけだし、大丈夫だね。

今まで、他の人や猫には変化出来たんだ。やれば出来る。成長出来るなら、あの二人との関係も、また違ったものになるかもしれない。

……別にあれをそのまま実践すわけじゃないよ？
何が悲しくて、痴女にならないといけないのか……あれは”私”にはきつと耐えられない。

この体をベースに、少し年齢を加える。
とりあえず、10歳ほど追加すればいいだろうか？

深呼吸をし、気持ちを落ち着ける。
成長した体を意識し、術を行使する。

いつものように、力が体に纏わり付くを感じる。

一瞬後には、幼子の姿は掻き消え、しなやかな体躯の少年が立っていた。

……うまくいったかな？

地面との距離が遠い。この距離感はどうも懐かしい。身長は160前後くらいだろうか？

以前の”私”は、高いヒールを履いて、確かこれくらいだったはず……
手足もスラリと長く、程良い筋肉が付いている。自分の体ながら、少し羨ましい。

だが、いきなり昔の自分に近付いた為か、強い違和感を感じる。
今まで変化した時には感じなかったから、やはり、この体をベースに成長させている為かと思われる。

ふと、湖面に映る姿を視界に入れる。
漆黒の髪が、ふわりと風に揺れる。
その姿を見つめ、見つめられ……その強烈なまでの違和感に思考が塗り潰される。

これは、ワタシじゃない……

「うっ……げほっ、がはっ……ぐっ……」

急激な嘔吐感に、一切抵抗が出来ない。
喉を焼く酸味に、無意識に涙が零れる。
少し気管も焼いたか？ 激しい咳き込みが止まらない。

そのまま、くずおれるかのように片膝を付いた。

嘔吐感が収まった頃、すでに術は解けていたようだ。

恐る恐る、湖面に映した姿を確認する。

よかった……いつもの体だ……。

……なんだか、ちょっち、疲れたかも……今は、何も考えたく、ない……かな……

思考を放棄すると同時に、青空に染まった静かな水面が近付いてきた……

12. 早く大きくなりたい？（後書き）

確か湖っぽい何かってありましたよね？
池だったかな？

焦りはろくなことを生み出さないって。

13. 箱

さして広くもない室内に、簡素なベッドが一つ。

その部屋には装飾などなく、無機質な印象を与えている。

窓からは、柔らかな月光が射し込んでいる。

白い壁に反射し、室内をほのかに照らし出す。

どこか侵しがたい静寂の中、僅かな吐息だけが聞こえる。

ベッドの上には、幼子が一人、穏やかな眠りについていた。

その吐息が、微かに乱れる。

ふると睫毛が揺れ、かたくなに閉じられていた瞼が持ち上がる。

「……んっ……あ……わたしは……」

その声に誘われたのか、窓際のひとときわ暗い影が動く。

「気が付いたかい？」

ベッドのほうへ踏み出した人影が、月の光に照らされ、その輪郭をあらわにする。

どこか幻想的なその光景に、夢見心地な視線を投げかける。

「……あ、カカシくん……？」

わた……ぼくは、どうして？」

「サスケ、覚えていないのかい？」

……キミは湖に落ちて、二日間目覚めなかったんだよ」

そうして彼は、ベッドの縁に腰掛け、慈しむようにサスケの頬を撫でる。

額にかかる前髪をかき分ける指が、ひどく優しく触れる。

その手が、その声が、”私”の心をざわめかせる。

「あの日、ネジと約束してたの忘れてたんでしょ？」

サスケを探してた彼が、湖に落ちるのを目撃してね。助けてくれたんだよ。

キミが忘れてたことに感謝しないとな。結果的に助かった。

あとで、お礼言うんだよ？」

そう言うと、約束を思い出したのか、サスケの視線が揺れ動く。

「……落ちる前、キミの様子がおかしかったって聞いたよ。

いったい、吐くほどの何があったんだい？」

サスケの瞳が、苦悩の色に染まる。

ともすれば泣き出しそうな、救いを求めるかのようなその瞳で、しかし、出た答えは謝罪だった。

「ごめんなさい……」

「オレには、話せないこと、なのかな？ お兄さんには話せるかい？」

その間にも、ふるふると首を横に振る。

「……わかった。でも、キミがそれに耐えられなくなる前に、ちゃんと吐き出すんだよ？」

そう言って、こぼれ落ちた涙を拭う。

微かに頷くのを見て、僅かながら安心する。

「さあ、朝までまだ時間がある。もうちょっと寝るといい。

キミが眠るまで、ここにいますよ……」

ネジの話では、どうやらこの子は、変化した後には吐いていたらしい。大きな術を使用した時には、体に負担がかかることもあるが、変化するぐらいなら子供でも出来る。

術自体が原因では無いだろう。

本人は、どうやら何か心当たりがあるようだ。

あんな顔をしつつも、心に秘めなければいけない何か……

「……私、か」

どこかで子供だと思っていたが、一個の人間として向き合えば……そうすれば、この子……いや、彼の悩みも少しは軽く出来ないだろうか？

傍らで眠るサスケを見ると、先程の苦悩など無かったかのように、穏やかな寝顔をしていた。



翌朝目覚めると、そこにはもうカカシ君はいなかった。
あれは夢かとも思ったが、夢だとは思いたくないので、そう思うことにした。

”私”が気が付いたと知らされ、色々な人が来てくれた。

お母様には泣かれ、イタチ君には物言いたげな困った顔をされ、ネジ君には盛大に説教された……

うん、ほんとごめんなさい。今度改めて、菓子折り持ってお礼に行くから。

あの思い付きは、”私”にとってのパンドラだったのかもしれない。
希望が残ったのかどうか、よくわからないけども。

いずれはあの姿になる日も来る。その時には、ゆつくりと馴染んで
いるはず……

そう、この手元に残ったもう一つの箱を開けさえしなければ……

これにはきつと、希望なんて欠片すら入っていない。

今この世界で、”私”が”私”^{サスケ}であるために、永遠に封印しようと
決意する。

13. 箱（後書き）

アケチャダメダアケチャダメダ：

さて、カカシさんのフィルターを1枚外すことに成功したでしょうか？

14. 水分摂取は忘れずに

突き刺さるような日差しが降り注ぎ、その暴力的な熱で世界を染める。

ときたま室内を過ぎ去る風は、こもった熱を追い払うには至らない。その広い道場に、荒い息が反響する。こたま

一人の幼子が、床に倒れ、大きく息を乱した。

はふ……床がひんやり気持ちいい……

「なんだサスケ、もう終わりか？」

「むう……ちよつとネジも、休みなよっ」

言葉と同時に、近くに立っていた彼の腕を、強く引く。

そのまま寝転んでいるサスケの上に倒れ込みそうになり、腕をついて体制を整える。

目の前にある、床の冷たさに目を細める顔に向け、彼は不敵に笑う。

「なんだお前、まだまだ元気そうじゃないか。それとも、寝技の練習でもしたいのか？」

「えっ……と、いろんな意味で危険そうだからヤメとく……」

そう言うと、若干視線が泳いだ。

いつもより顔が赤い気がするが、暑さのせいかな。

「そっそれより、やっぱりネジには叶わないな。この歳の一年の差を思い知るよ」

「そんなこと言って、お前はオレの攻撃ほとんど避けてるじゃない

か」

「だって、当たったら痛いんだもん。相変わらず容赦無いんだもん
なあ」

どちらともなく、小さな笑いが零れる。

そのまま二人で、暫し床の冷たさを堪能していると、外から足音が
近付いてきた。

「ネジ兄さん、サスケくん。お水、持ってきたから……」

開け放した入り口から、ヒナタが顔を見せた。

差し出された水を、一息に飲み干す。

体の隅々まで行き渡るようなその感触に、ずいぶんと長い時間訓練
していたのかと気付く。

こんな日に水分取らないとか……危なかったかも？

「ありがとうヒナタ。いつも助かるよ。

道場も長時間占有しちゃったな。今日はもう終わるから、お礼言
つといってくれるかな？」

こくこくと頷く姿に、どこかほんわかした気分になる。

思わず手が出そうになるが……激しい運動の後には、あまり近付き
たくない。

ああ、シャワー浴びたい……って言うか……

「あつい……」

「まあ、夏だからなあ」

「俺ちよつと水と戯れてこようと思うんだけど、ネジはどうする？」

「……お前と水とか、悪い印象しかないから監視しに行くよ」

「なんだソレは。いや、ほんとその節は申し訳ない……。」

えっと、ヒナタはどうする？」

「あつ、わつ、わたしはいいですつ。行つてらっしゃいっ」

慌てちゃって、やっぱり可愛いなあ

ヒナタに別れを告げ、ネジ君と二人で湖に向かうことにした。

たわいない会話で、茹だるような暑さを誤魔化しつつ歩を進める。

こんな日にも、公園には子供が溢れている。

木陰があるとはいえ、みんな元気なものだ。

ふと視線を向けたその公園に、ぽっかりと空いた一角が見えた。

そこには、ブランコに腰掛け、一人遊ぶでもなく、周囲の子供たちを見つめる姿があった。

その背中が、リストラされた会社員のように、どこか哀愁を感じる。

あの黄色い印象の子供は……

「ごめんネジ、ちょっと行ってくる。いいかな？」

その一角に目を向けつつ尋ねるが、特に否定も無かったのではっとする。

子供にあんな目をさせたままなのは、良くないよね。

「キミ、暑くない？」

なんと声掛けようか迷ったが、思考のほとんどを占めていた言葉が出た。

急に声をかけたからか、かなり驚いた表情をしている。

ああ、なんかこれ完璧にナンパじゃない？ 『キミ、お茶しない？』と同じノリだったよ……うわ何やってんだ”私”はっ
それもこれもきつとこの暑さのせいだよねっ

「ごめん、驚かせたかな？ 俺はサスケ。キミの名前を聞いてもいいかな？」

「……うずまき、ナルト」

「ナルト……うん。今から水と戯れに行くんだけど、暇なら一緒に行かないか？」

こんな所にいても、茹だるだけだよ」

そう聞いてみると、ちょっと落ち着いたのか、どこか探るような目をしながらも頷いてくれた。

このころはまだ大人しいのか。悪戯で自己表現することも無いみたいだしね……

手頃な位置にあった頭をぽんぽんと軽く叩き、ネジ君のいるほうへ促した。

ネジ君が、微妙な表情をしているのに気付く。ナルトに他意がある

わけでは無さそうだが。

「うん？ ネジも頭撫でて欲しいのかい？」

「……バカなこと言ってないで、さっさと行くぞっ」

おっと置いて行かれそうだ。ごめんね、ちょっと悪乗りしたかも？

14. 水分摂取は忘れずに（後書き）

ナルトの口調って実は難しいのか。
ということに気付く。

それにしても暑いです。海…はベタつくから、川に行きたいデス。

15. 人

夏の日差しを受け、眩しいほどに輝く湖面が広がる。

火照った体に、水の冷たさが優しく絡みつく。

水中から見上げる空は、ゆらゆらと揺れ、幻想的な碧を創りだす。

「ふはっ」

水面に顔を出す時の浮遊感は、結構好きだったりする。

ふと、栈橋の縁に腰掛け、こちらを見つめる視線とぶつかる。

「ネジは泳がないの？ あ、もしかして泳げないとか？」

「……お前を見てたんだよ。それに、泳げなかったら助けられないだろう？」

「ああそうだった……あれは水のせいじゃないよ。大丈夫、俺ちゃんと泳げるから。ありがとう」

少し思案するも、納得したのか、そのまま水に飛び込んだ。

視線を巡らせると、少し離れた所に、金髪の頭が見えた。

その顔に軽く手を振る。

ちゃんと泳げるんだ。よかった……。

まあ、泳げなかったら教えようと思ってただけだね？

それにしても、あの公園の雰囲気は酷かった……

九尾事件は確かにたくさんの人が犠牲になった。

”私”の知り合いは、当時は家族のみだったから、あまり実感は無いけど。

その原因となった九尾が、ナルトに封印されてる。

得体が知れなくて怖いのはわかる。

その原因自体も、骸を晒したわけじゃない。

残された人達の感情の行き場が無くなっているのもわかる。

でも、たとえそうだとしても、こんな小さな子供に向けるような感情じゃなかった。

子供は周囲を見て育つものだ。

大人達が無視するような、悪意を込めて睨むような、そんな態度だと、子供だって素直に真似る。

そんな態度ばかり取られたら、ナルトだって、自分はそういう存在なんだって思うじゃないか。

せめて、ほんの少しでも、彼を彼として扱う人間がいれば……

日差しが少し弱まった頃、岸部の木陰で休憩することにした。服が乾くまでまったりしつつ、湖からの涼しい風を堪能する。ナルトも、少しは気が紛れただろうか？

座る位置が若干遠い。遠慮しているのが伺える。

それにしても、子供って何して遊んでるんだろうねえ？

まあ、”私”には混ざって遊ぶのは無理だけど。先に牽制しとけばいいか。

「ナルト。俺は子供の遊びはよくわかんから、そういうのには混ぜられないけど。」

見かけたらいつでも声をかけてくれよ？」

「……なんで？　なんでオレを？　今まで誰も、オレのことなんかっ！」

どこまでも真っ直ぐな目に見据えられる。

その手は、震えるほどに固く握られていた。

ああ……この子はこんなにも……。

「……ねえナルト。人っていう生き物はね、なかなかその本質を見抜くことは出来ないものなんだよ。」

外見に騙され、行動に騙され、取り巻く言葉に騙され、その背負う物に騙されるものなんだ。

俺とネジだって、お互いを完璧に理解することは出来ない。これは、人が人として生きているなら当然のことなんだよ」

そうやって、静かに、囁み締めるように話をする。

その黒い瞳は、星々を抱いた闇夜のように深く、優しい色をしていた。

「それでも、人は人を大切に思うことが出来る生き物なんだ。」

わからないから理解しようとする、誠実であろうとする。素敵だ

と思わないかい？」

「でも、オレは、オレにはそんな事は……」

「まあ、理解出来ない物は怖いからね。生き物は案外臆病でもあるんだ。

知る労力を払わず、知ることによって傷付くことを恐れ、最初から遠ざけるって場合もあるけど……

それが全てと思わないで欲しいかな？」

ナルトの、青空を溶かしたような目が、不安気に揺れる。

「俺はね、ナルト。ちゃんとキミのことが知りたいと思っているよ」

そう言うと、ナルトの頭をぽんぽんと優しく撫でる。

ああ、顔がぐちゃぐちゃだよ？

「男の子の涙は貴重なんだ。そんなほいほい見せちゃダメだよ？ほら、おいで」

軽く抱き寄せ、宥めるように背中を撫でる。

ネジ君を見ると、優しく頷いてくれた。

こういう事を語ったのは初めてだけど、どうやらなんとか言いたいことは伝わったようだ。

「ま、女の涙は高いんだけどね……」
高いうえに怖いんだよ？
くすっ

15. 人（後書き）

うぐっ…語りはなかなか難しいデス。

7／6 前半改変。ナルトについて少々追加。ネジ君の独白は胸に
しまってもらいました。

16. 猫

――てしてしっ

何か柔らかなものが窓を叩く音が響く。

そこには、闇夜を切り取ったかのように黒い、艶やかな毛並みをした子猫が一匹。

そちらを見たのがわかったのか、もう一度てしつと音がする。

まるで、早く開けろと言わんばかりに。

いや、実際そうなのだろう。この気配には覚えがある。

薄く開いた窓から、刺すような空気と共に、その小さな体がするりと入り込んできた。

ふるりと一つ身震いすると、室内の暖かさを堪能するように、ベッドの上で丸くなる。

「温かいお茶でも飲むかい？」

少し考えていたようだが、今はいらないらしい。

その隣に座り、読みかけの本をめくる。

彼は時々、この格好で出歩いているようだ。

特に夜間は、子供の姿だとなにかと目立つ。

さすがにこの時間に、表からいつもの姿で来られると、オレにあらぬ疑いが……

その辺の考慮もしてくれている……のかもしれない。

彼は色々ときといからな……。

彼と出会って、何年になるだろうか。

最近、ふらりとここに来ては、考え事に没頭していく。

楽しい考えでない事だけは確かだ。

力になってやりたいが……話してくれるのを待つというのは、なかなかにはがゆいものだ。

ふと、隣にある子猫特有の柔らかな毛並みに手がのびる。

その毛並みを暫し堪能することにした。

これぐらいだと、彼の思考の邪魔にはならないだろう。

しばらくすると、その手に触れる、ふにとした感触がある。

小さな手で、てしてしと叩かれる。

その影から、こちらを見つめる瞳が覗く。

「……すまないサスケ。邪魔したか？」

ぽふっとベッドが沈み、子猫の変わりに少年が姿を現す。

彼の黒髪が、柔らかに揺れる。先程までの子猫の毛並みを思わせた。

少し潤んだ瞳でこちらを見つめ、その頬が、僅かに赤く染まる。

「カカシくん……手つきエロいよ？」

「……………」

「……あつと、そうだ。水……いや、飲み物持ってくるよ。サスケもいるだろ？」

何を動揺する必要がある？ 毛並みを堪能してただけじゃないか！

……それにしても、あの目は……いやいや、とりあえず飲み物をだな――

くすりと微かに笑い声が聞こえた気がした。

先日、イタチ君が中忍となりました。

そう。中忍。

それ自体は、すごいことだと思う。

実際、心からお祝いの言葉をかけたんだよね。

……けど。

そう、忘れてた訳じゃない。

今後高い確率で起こるだろう『あの事件』を……。

イタチ君が、一步それに近付いたという事実を……。

”私”がここに生まれてから、すでに6年が経過した。

あの話だって、元々おにいちやんの部屋にあったから読んでたくらいしか知らないのに。

そこに6年の時間経過で、記憶なんてあつて無いような物。

そんな臆気な知識からは、どうすればいいかなんて、まったく推測がつくわけなかった……

ただ、”私”にもわかるくらいには、うちのは大人達の雰囲気が変わってきた気がする。

どうすればいいんだろうか？

火影様に、九尾事件の主犯はうちはマダラだから、一族自体は関係無いとでも言えбайい？

誤解だから、お互い歩み寄りましょうとでも？

でも、マダラは現在死んだことになってるし、そもそも証拠が無い。”私”はあの時、生後半年にもならなかったのに。知っているというのはおかしすぎる。

実際、見た訳じゃない。

納得させるだけの根拠が示せない……。

そもそも、原因はそれだけとは限らない。

今までのうちは一族と里との関わり。

うちは一族の選民意識。^{エリート}

うちは一族の力を狙う物。

うちは一族に恨みを持つ物……

そのどれもが考えられるのではないだろうか？

それぞれが複雑に絡み合った結果であるなら、”私”が動けたとして、ただ先伸ばしになるだけかもしれない。

もしくは、”私”が思ってもみないこともあるかもしれない。

”私”に、火影様を納得させられるだけの、無視出来ないほどの力があれば、何か変わっただろうか？

あと何年、このまま過ごせるのだろうか。

それまでずっと、この思いを秘めていなければならない……？

さりと頭を撫でられる。

その手から、優しいぬくもりが伝わってくる。

今までの、潰されそうな程に苦しい思いが、少しだけ軽くなる。彼のこうした気遣いは、すごくありがたい。

だから、こうしてここに来てしまうのかもしれない。

せっかく淹れてくれたお茶が、すっかり冷めちゃったなあ。

「カカシくん……」

「ん？ どうした？」

「……ありがとう。俺、もっと強くなる。頑張るよ」

イタチ君を守れるくらい強く……

やわらかな日差しが室内を満たす。

遠くで鳥達が朝の挨拶を交わしている。

外はまだまだ寒いのか、無意識に体を傍らへすり寄せる。

……あったかい。

その光とぬくもりで、徐々に意識が浮上してくる。

ゆっくりと目を開けると、柔らかそうな銀色が目に入った。

いつもは隠されている目の傷が痛々しい。

その薄く開いた唇がほのかに色気を漂わせ、”私”を誘って……つて、え？

”私”が起きた気配に気付いたのか、彼の黒い目が開く。

寝起きの気怠さをまとい、更なる色気が漏れる。

「おはようサスケ」

「ひゃわっ……おっおはよう……」

「ごっごめん、俺、寝ちゃったんだ？」

顔が熱い。きっと盛大に赤くなっているんだろう。

思わず彼の胸元に顔を伏せる。

どうしよう……顔があげれない。

それよりも、そう、素顔を初めて見ちゃった！

前々から、綺麗な輪郭してると思ってたけど。

何あの整いっぷり。だだもれの色気は。反則だよ……

あれは無自覚なのか？ そうなのか！？

くっ……子供だと思って……ドウシテクレヨウ……

そっそれよりも、これって朝帰りってやつですか！？

……ヤバい……イタチ君に怒られる……

その日の午前中、里に盛大な雷鳴が響いたとか響かないとか。

16. 猫（後書き）

変化時の質量とかその他もろもろは、ふぁんたじーだからって事で。
あんまり動物へ変化してるのって記憶にないけど、使い勝手悪いの
かな？

17. 入学前日

いつも訓練をしている森の中、”私”は木陰からイタチ君の姿を見つめる。

森の静寂と相まって、鼓動が高鳴るのを感じる。

イタチ君が中忍に昇格してから、こうして時間を取るのは難しくなった。

この、貴重な時間を無駄にしない為、一挙手一投足を見逃さないように、ただひたすら見ることに集中する。

その姿が、宙を舞う。

その瞬間、”私”の視界が変化する。

彼の流れるような動作、筋肉の動き、放たれるクナイの軌道、そこに込められた力。

その計算しつくされたかのような動きに魅了される。

放たれたクナイの全てが、的の中心に刺さるのを確認する。

クナイ同士を当て、跳躍させることにより、死角の的にも綺麗に刺さる。

しばし呆然と見惚れていると、イタチ君がこちらを振り向いた。その表情に、若干の驚きを確認し、慌てて力を抜いて駆け寄る。

……写輪眼で見てたのバレちゃったかな？

イタチ君に隠すつもりは無かったけど、厄介ごとはなるべく避けたいんだよね。

「驚いた。写輪眼使えるんだ？」

「えっと、まだ上手く使えないんだ。見ることに集中した時、たまに使えるくらい？」

あ、でも二人だけの秘密ね。使いこなせるようになってびっくりさせたいんだ」

「……わかった。頑張れよ。」

それじゃ、ちょっと早いけど、そろそろ帰ろうか」

イタチ君の隣に並び、ゆっくりと屋敷を目指す。

明日から”私”も、とうとうアカデミーへ行くことになった。

ちょっと興味はあるものの、それだけの時間が拘束されるのは、結構痛い。

そんなふうな話を話していると、イタチ君に友達を作るのも大切だよって諭された。

まあ、確かに本来ならそうなんだけどね？

大人になってから小学校に通うような、そんな気恥ずかしさが……ねえ？

門をくぐろうとすると、お父様が待っていた。

何か話があるようだけど、”私”も同席していいのかな？

どうも”私”は、この人が苦手だ。

なんだか、雰囲気があわないんだよね。

一族を纏める立場にいるから、色々と考えないといけないことも多

いんだらうけど。

どうしてこう、地位ある男って威圧感が酷い人が多いんだらうねえ。ある程度は必要なことだとは思うけど……

もっと小さい時は、可愛いところも見せてたんだけどなあ……あの時は油断してたのかな？

まあ、”私”^{サスケ}のお父様には変りないし、これでも感謝してるんだけどね。

部屋に入り、お父様と向い合って座るイタチ君の横に、大人しく”私”も腰をおろす。

「さすがオレの子だ……中忍に昇格してから、たった半年でここまで来た」

うんうん、イタチ君はいつも真面目に頑張ってるからねえ。

自分のことじゃないけど、評価されるのはなんか嬉しいな。

「明日の特別任務だが……オレもついて行くことにした」

……ちょ、ちよつとマテ！！

どこの世界に、保護者同伴で仕事する社会人がいるよっ！

そんなの連れて来るのは問題外だが、押しかけてくる保護者とか、本人にとってもまわりにとっても、迷惑以外の何者でもないでしよ
うがっ！

手伝うって事だとしても、要請されたわけでもないのに、そんなの
和を乱すだけでしよ……

……前日にいきなり決定を伝えるとか……何考えてんだこの人……

ああ……イタチ君もやつぱり呆れてるよ……

「この任務が成功すれば、イタチ……お前の暗部への入隊がほぼ内定する」

暗部……そうか。この時期なんだ。

また一步進んじやうのか……

一気に気持ち沈みそうになるのを、なんとか耐える。

「分かってるな……」

そう言いつつ、お父様の瞳に紋様が浮かび、威圧感が増す。

「そんなに心配しなくても、大丈夫ですよ。それより……」

イタチ君が冷静な対応で打ち切り、”私”に話を促す。

ごめんね、なんか気使わせちゃって。

でも、別にこの人に無理に来て欲しいわけじゃないんだよ？

一人が寂しい年齢でもないし……まあ、誰が来るのか聞くだけ聞いてみますか。

「あっと、父様……俺明日——」

「明日の任務は、うちは一族にとっても大事な任務となる！」

……”私”の存在は無視ですか。そうですか。

聞く耳持たないとか、イラッとするよね。”私”もまだまだ大人気ないかあ。

「……オレ、やっぱり明日の任務やめるよ」

「何を血迷ったことを言ってる!？」

明日がどれ程大事な日か、お前にも分かっているはずだ！
一体何だと言うんだ!？」

「明日はサスケのアカデミー入学式についていくよ
入学式には、身内が参列するのが通例。通達もあったでしょ？」

……父上」

ちよ、ちよっとまったああ！

いや、イタチ君が来てくれるのは嬉しいんだけど、でもね？

「兄さん、その気持は嬉しいんだけど、直前の任務放棄とか無責任なことをさせるわけにはいかないよ。」

俺なら大丈夫。ちゃんと先生に挨拶してくるから。

それと……父様。

保護者同伴で任務なんて、聞いたことはありませんよ？

逆に兄さんの信用を貶めるんじゃないんですか？

助けが必要な任務なら、兄さんも要請するでしょう。それくらい判断付かないなら、そもそも中忍になっていませんよ。

俺でも理解出来ることが、父様にわからないはずありませんよね。
心配なのはわかりますが、もう少し兄さんを信頼してあげてはどうですか？

あと、写輪眼使って威圧する癖はやめたほうがいいですよ」

ふう、言っちゃった。ちよっとスッキリ！

……あれ？　なんか二人とも絶句してる……

何かオカシイこと言ったかな。ちよっと熱くなっちゃったのは認めるけど。

「……もういい。わかった。入学式へはオレが行く」

そうして話は無事終わった。

あつれ……？ 別に誰も来なくていいって言ったつもりだったんだけど……まあいいか。

廊下に出ると、イタチ君が頭を撫でてくれた。

ああ顔が緩む……イタチ君もきつと色々言いたいことがあったんだろうけど、”私”が言うほうがまだ角が立たない、よね？

17. 入学前日（後書き）

なんだかやたらと難産でした。

おつかしいなあ……？ 原作あるのにね。

18. デミっこになりました

「はぁ……」

朝から何度目かのため息が漏れる。

目の前には、本日からお世話になるアカデミーが、その堂々とした大きな姿を晒している。

アカデミー前の広場には、これから同級生になるであろう子供達が、揃って列をなして並んでいた。

周囲を見渡してみると、どの子供たちの顔も、一様に喜びと好奇心で満ち溢れている。

前方では、火影様が祝いの言葉を述べているが、そんなありがたい言葉も、右から左へと聞き流す。

見上げる視線の先には、新しい一步を踏み出す子供たちを応援するかのように、澄み渡った青空が広がっている。

その青さも、今の”私”にはまったく心に響かない。

昨日のあの話から、いつにも増して気まずい雰囲気のお父様と、二人並んでここまで来ることになった。

後方にいる大勢の保護者達の中で、一人難しい表情をしつつ佇んでいるのが確認出来る。

それでも氣力をゴツソリ奪われるというのに……

「……サスケくん？ どうしたの？」

隣からヒナタがこっそり聞いてきた。

教師や保護者から少し遠く、周囲も子供達に囲まれている為、あまり目立たないだろうからいいかと言葉を返す。

「ああ……いや、別にたいした事じゃないんだけどね。これ……」

そう言って軽く服を引っ張る。

「そういえば、いつも着てる服じゃないね？ 後ろに家紋付いてる」

「父様が、どうしてもこれだけは譲れないって言うんだ……」

「うん、いつもの服のほうがいいかも……見慣れてるからかな？」

そう、今までなんだかんだと避けて避けていた家紋付きの上着。

背中に黒地に紅白で、うちわの模様が大きく描かれている。

お父様やイタチ君……いや、うちは一族の皆は、普通に着ているけど。

家紋が誇りなのかもしれないけども……

ここでは皆が普通に受け入れているから、”私”のほうがいい間違って
いるのかもしれない。

けど、どうにも”私”の感性和真っ向から対立するようなこのセンス。

もう少ししなものな服は無いものだろうか？

……って言っても、ほとんどコスプレっぽいのしか見かけないのよね……斬新すぎて困るよほんと。

明日からは絶対いつもの服を着てきてやると、一人密かに誓っていた。

「ヒナタの普段着はあんまり見たことないけど、今日の服も可愛いね。よくにあってるよ」

膝上までの白い服から、黒いレギンスが覗く。

襟元と裾に散りばめられた小さな花柄が、子供らしい可愛らしさを際立たせる。

「そっそんなことっ……あ、あの子達のほうが、可愛いと……」

ヒナタは前方に数人かたまっている女の子達を指し示す。

確かにあの子達も可愛い格好をしているけど、ヒナタの格好も見劣りはしない。

「うーん、ヒナタはもっと自信持っていと思うけどな。」

それとも、俺を嘘付きにしたいのかな？」

「あう……／＼／＼」

返答に窮したのか、そのまま視線をあらぬ方へと向ける。

ほんのり頬が赤いのは気のせいか……？

ちよっと言い過ぎちゃったかな？

でも、普通に可愛いと思うんだけどねえ。成長が楽しみだよほんと。

ヒナタでまったり癒されている間に、前方のお話は一通り終わったようだ。

天気もよく、過ごしやすい気候ではあるが、朝から立ちっ放しですすがに少し疲れた気がする。

せめて椅子でも用意してくれていれば……まあ、屋外だし仕方ない。

この後は特に何もないようで、明日からのことも、配られたプリントに書いてあった。

これで入学式も全て終了らしく、集まった人々は、帰宅する者や挨拶に向かう者と、それぞれ移動し始めた。

”私”も大人しくお父様の隣へと向かう。

入学式ってこんなもんだっけ？

一番直近でも15年以上前だ。思い出せるわけもないか……

そう思いつつ、入り口付近で先生方に挨拶をするお父様の横で、社会で培った笑顔——営業用とも言う——を振り撒くことに専念する。

少し肉付きの良い教師に挨拶をする。

どうやらイタチ君のことも知っているようだ。教師歴は長いのかもしれない。

この人が担当になるんだろうか……明日になってみないとわからないか。

出来れば優しい人がいいなあ。

とりあえずアカデミーでの目標は、私の知っている話通りの年に卒業することかな。

ナルト達と一緒にね。

じゃないと、もし間違って早く卒業しちゃったりした日には、あの蛇がどう動くか……

違うタイミングで襲われたら……やばい、怖すぎる……

その為には、ある程度以上の力は出しすぎないように気を付けないと、かな。

小さい頃は、子供の成長ってすごいと無邪気に思っていた。それから徐々に比較対象が増え、どうも普通より強くなっているような気がする。

ネジ君にはよく、素早いあの避けるのがうまいあの言われる。まあ、痛いからね。必死だったよ。

元々、この体の潜在能力が高いのもあるかもしれないけど。

”私”というイレギュラーが、変に影響しているのかもしれない……

本来のサスケと今の”私”の体が、完全に同一かどうかは証明出来ない。

生まれたタイミングと名前を継いでいるだけで、体自体は違うのかも……

……いや、今は”私”がサスケなんだ。代わりなんていないんだから。

会話を耳にしつつ思考の渦に身を浸していると、ふとこちらに言葉を向けられた。

「キミにも期待しているよ」

「兄さんのように、立派な忍になれよ」

おっと聞き流すところだった……あぶないあぶない。

「はい。兄さんのようにとはいかないかもしれませんが、精一杯頑張りますので、ご指導のほどよろしくお願いします」

「ははっ、なかなかしつかりしたお子さんですなあ」

ちよっと焦って子供らしくすること忘れちゃった……気にしてないみたいだし、大丈夫だよね？

18. デミっことになりました（後書き）

服屋さんとかあるんでしょうか？

いや、きつとある…よね？

7／13 ちよつとだけ描写を加筆。

7／17 少し見直し修正（話は変わっていません）

19. 朝の教室にて

アカデミーへ入学してから数週間。

サスケはようやく通い慣れてきた廊下を歩き、教室の入り口をくぐる。

少し立ち止まるも、軽く室内を見回し、定位置となりつつある窓際後方の席に着く。

朝の柔らかな陽射しに照らされ、ぽかぽかとし、なんとも眠気を誘われる。

少し早いのか、教室の中にはまだ半分ほどしか人がいない。ところどころで、軽い朝の挨拶をしているのが聞こえてくる。そんな中、見慣れた姿が入ってくるのを見かけ、声をかける。

「おはようナルト。隣おいだよ」

振り向いた顔には、嬉しいような少し困ったような表情が浮かぶ。廊下側の席をチラリと見つ、歩み寄ってきた。

「もしかして、また授業抜け出すつもりだったのか？」

「そっそんなこと、これっぽっちも思っていないってばよ！」

「おまえそれしっかり思ってただろ……あとでわかるまで教えてやるから、聞くだけでも聞いとけよ？」

そう言って隣を指し示すと、大人しく腰を下ろした。

「サスケはいいよなあ〜十分強いじゃん。」

オレだって、もっと強くなりたいのに……」

机にぺたりとなつきながら、そう言葉を漏らす。

どうやら、つまらない授業時間を、修行に当てるつもりだったようだ。

その気持ちは痛いほどよくわかるが……

「ナルト。強さだけを求めるのはダメだよ。目に見える力って言うのは、一番わかりやすいけど、一番溺れやすくもあるんだ。

知識やその他のこともバランスよく学ばないと、どこかでひどい目に遭うよ?」

少し心配げに言うサスケの言葉に納得しつつも、人には向き不向きがあるんだと言わんばかりに、拗ねた表情を見せる。

「修行なら、あとで一緒にやろう。ナルトなら、きっと強くなれるよ」

「うえ……おまえってば手加減知らないからなあ」

そう言いつつも、少しの不満と多大な期待を込めた眼差しを向けた。

ナルトの脱走に釘を刺すことに成功し、サスケはいつも通り読書に移る。

このまま授業中もよく読んでいたりするのだが……

ナルトには真面目に聞けと言いつつ、少しズルイのではないかと思う。

しかし本人曰く、授業もしっかり聞いているとのこと。

ここは学ぶ場所だし、ついでにもっと知識を仕入れてもいいだろう？ と。本当かどうかは分からないが。

ナルトは少し恨めしげな気持ちを混ぜつつ、サスケの横顔を眺める。こうして見ると、彼の整った顔立ちがよくわかる。

その切れ長の瞳は、彼の纏う穏やかな雰囲気を受け、柔らかさを増している。

まだ幼さの抜けない顔立ちをしつつも、その幼さをまったく感じさせない。

物腰は柔らかく、男の荒々しさは見あたらない。女々しいと言うわけではないが……

何はともあれ、サスケの隣は居心地がいい。それだけは確かだ。

机に頬を預け、覗き込むように見ていたのが気になったのか、サスケが本から視線をはがす。

何か言いかけたその唇は、しかし、僅かに聞こえてきた言葉によって閉ざされた。

「あれってうちのの——だよな？」

「あの隣……なんであいつが——」

「ちっ、図々しいやつだな」

サスケの隣から、カタリと小さく椅子の鳴る音がした。

小声でもナルトにはしっかりと聞こえていたようだ。

その顔には、先程までの笑顔は見当たらない。

「ナルト……」

俺がお前を呼んだんだ。気にするな。そこに居ればいい。いくつかの言葉が浮かぶが、そのどれもが音になる前に飲み込まれて消えた。

「……あんな奴ら、やるなら言葉だけで十分だ。勝ってこいよ?」

そう言葉にすると、ナルトはにやりと笑い、立ち上がった。

彼らの元へ向かう背中を見守っていると、背後の席から声がかかる。

「はぁ……お前まためんどくさいことやってんなぁ」

「ああ、慰めの言葉は簡単なんだけどね……」

あれでもずいぶんましになったよ。昔は自分の気持ちを表現しようにしなかったからね。

っていうかシカマル、いつからいたんだ?」

「ん? ナルトが熱心にお前を見つめてる時かな?

まあ、先生来る前に片付くといいな」

ナルトをけしかけた手前とめはしないが、確かに時間的に微妙で、めんどくさいかもしれないと思うのだった。

19. 朝の教室にて（後書き）

なんだかそこはかたなく黒い気がするのにはナゼなんでしょう？

20. 言葉にしないと伝わらないこともある

先日、夜中にお父様とイタチ君が言い争っているような声を聞いた。どうやら一方的に、お父様がイタチ君に無茶なことを言っていたようだ。

任務よりも、一族を優先しろとか何とか……

サスケは家の縁側に腰掛け、庭を眺めながら、つらつらと物思いにふける。

以前よりも、一族至上主義が強まったような気がする。

強まったというか、目に付くようになった……が正解かな？

それだけ、里との緊張状態が増してきたのかもしれない。

幾度かお父様には、それとなく諭すようなことを会話に織りまぜてみたものの、まったく効果は無いようだ。

子供の言う事だからというのもあるかもしれない。

けど、それ以上に、その人の中核を成す思想は、簡単には変わらないということか。

上に立つ者として、もっと率先して平和的解決を模索して欲しいんだけど……

「サスケ、上期の成績トップだったんだって？ おめでとう」

「うん、ありがとう……」

近付いてきたイタチがそう声を掛けつつ、サスケの隣に座る。

それに対して、あまり嬉しくは聞こえない声で返事を返してしまう。

「嬉しくないのか？」

「いや、まあ、ちょっと虚しい……かな」

さすがに小さい頃から色々やってたし、これくらい出来てあたりまえかと思う。

自慢するのも恥ずかしい。

「……サスケ、何か悩み事でもあるんじゃないか？ 最近特に元気ないよ？」

まさか……あの人に何か言われたとか……」

「いや……大丈夫だよ兄さん。カカシくんは何も言っていないし、他の友達とも仲良くやってるよ？」

誤魔化すようにイタチから視線を外し、そのまま庭に向ける。その態度は、何かありますと言っているようなものだった。

そんなに表に出てたかな？ ……まあ、出ないはずないか。

ごめんイタチ君。たぶん今色々つらい立場だろうに、”私”の事でも悩ませて。

でも、この悩みはさすがに当事者には言えないよね。

ふとどこか雰囲気が変わったのを感じて隣を見上げると、イタチの普段見せる事のないような真剣な眼差しとぶつかった。

「……オレはね、昔から、サスケは何か大きなものを抱え込んでるっていうのを知ってるよ。」

それを、全部自分だけでなんとかしようとしていることも……今の悩みがそれかどうかはわからないけど」

イタチはそこで言葉を切り、その先を言うべきか少しだけ躊躇う。しかし、その瞳には確かな決意が浮かんでいた。

「サスケが言ってくれるか、解決するまで待つつもりだったけど……これだけ聞いてもいいかな？」

……オレは、サスケを守るのに値しない存在なのかな？ サスケはオレに守られたくない？」

その声には、僅かに悲しみが込められている気がした。

イタチの言葉で、サスケは自分がそれほど酷い状態だったのかと悟る。

そんな見るからに酷い状態にもかかわらず、誰にも頼ろうとしない行為が、イタチにここまで言わせてしまったのかもしれない。

これはしっかり答えを返すべきかと思い、サスケは徐ろに立ち上がり、庭に降り立った。

そのままイタチのすぐ前に回りこみ、視線を合わせる。

「兄さん、俺は兄さんが守りたいって思ってくれてるの、すごく嬉しいよ？」

色々話していないことは、確かにある。けど、今は、言えないかな。ごめんなさい。

兄さんを頼りにしていないわけじゃないんだ。……違うね、いつも頼りにしてばかりだよ。

でも、正直な気持ち、守られてばかりはちよつと嫌かな。

……俺もね、兄さんを守りたい」

サスケはその右手をのぼし、イタチの頬にそつとふれた。

「兄さんが今後、どんな道を選ぶとも、どんなふう to 成長しようとも、俺は、兄さんを愛してるよ？」

たとえば俺に、他に愛する人がいたとしても、兄さんは俺の兄さんなんだから」

この言葉が、この思いが届きますように……

そう願いを込め、彼の額にそっとキスを落とした。

ほんの数瞬くらいだろうか。

彼から僅かに身を引いた時、クスッと笑い声が聞こえた気がした。目の前の顔を覗き込むと、その瞳には、もういつもの穏やかな色しか見えなかった。

「サスケはたまに、こっちが恥ずかしくなるようなこと言うよね？」

「はえっ……あっと……」

改めて言われたからか、にわかに顔に熱を感じる。

「でっでも、ほんとのことだからっ」

「わかってるよ。……ありがとう」

うう……感情に任せて動くところくな事にならないによ……

まあ、でも、イタチ君がどこことなく嬉しそうだからよしとしよう。うん。

サスケの顔の熱が解消するには、まだ暫くかかりそうだった。

20. 言葉にしないと伝わらないこともある(後書き)

いつのまにか告白しちやりますやんっ
どうしてこうなった！

あくまで兄弟愛ですよ？ …たぶん。

21. 放課後のご予定は？

放課後の教室で、サスケは一人帰り支度をする。
周囲には、もうほとんど残っている人はいなくなっていた。

今日はネジ君と約束があるって言うのに、少し遅くなったかなあ。
こういう時に限って、先生にお願い事をされたりするし。
断ればいいんだけど、日本人の性って言うのかな？
まあ、まだ許容範囲だよな。……着いたら謝り倒そう。

そういえばイタチ君へのこっぴどかしい発言をしてしまったあの日、
家に殴り込みがありました。

あのイタチ君との、なんとも言えない恥ずかしい空気をぶち壊す勢いでね。

あれはもう数ヶ月前になるのかな……

うちは一族の頭の固そうなのが三人も押し掛けて、上から目線で、
イタチ君への恫喝紛いのひどい言いぐさ。

うちはシスイさんって方が自殺したそうだけど、実は他殺じゃない
かって。なんかイタチ君を疑ってた。

さんざん”私”の忍耐力を折ってくれちゃって……つい説教モード
になるのは仕方ないよね？

最後にはなんか捨て台詞吐いて帰ってたけど……
あんな過激派チックなのがいるから、どんどん平和的解決から遠ざ
かるんだろうなと再認識したよ。

うちはの血に才能があっても、思考が凝り固まってたら意味無いの
に。

……なまじ力があるから、それに訴えようとする、か。

ってかやばい、急ぐんだった！

思考に浸るのは悪い癖だと思いつつも、ついつい余計なことまで考えていたようだ。

遅れているのは間違いないので、少し急ぎ気味に廊下へと踏み出した。

「サスケくうくん！」

どこか甘ったるい高い声が、廊下に響く。

来るだろう衝撃に備えると、やはりと言うべきか、背後から勢いに任せて抱きつかれた。

肩に届かないくらいによく手入れされた金髪が、サスケの首筋をさりと撫でる。

まだ残っていた子供達が、驚いたようにこちらを見ている。

廊下の先では、数人の女の子達が、羨ましそうに背後の彼女を見ていた。

……間違っても真似しないでよ？

そう思いつつ、もう何度目かの注意の言葉を背後に向ける。

「……いの、危ないから飛び付いたらダメだって言ったよね？」

「えーだって、もういないって思ってたから嬉しくって」

そう言いながらも、まだまだ離れようとはしない。

ほんとにこの子のアクティブっぷりには驚かされる。

あの話でも、かなり積極的な娘だとは思ってたけど、想像以上だったようだ。

まあ、あのサスケと”私”では性格も違うから、いのの行動も、より積極的になってるだけかもしれないが。

「ほら、とりあえず手、離してくれるかな？　このままだと歩きづらいからね」

「んゝ残念。じゃ、かわりに一緒に帰ろうよ」

名残惜しそうに、いのの手がサスケから離れていく。

玄関に向かい、いのと並んで歩を進めながら、断りの言葉を紡ぐ。

「あつと、ごめんね。先約があるんだ。

ちょっと遅れちゃってね、急いで行かなきゃいけないんだ」

「ええゝっ！　せつかくだったのになあゝ」

そのちよつと拗ねた表情も、子供らしくてなかなか可愛い。

どこか微笑ましく思いながら、サスケは慰めるかのように、いのの頭にぽんぽんと手を置く。

玄関に到着するまでには、なんとかいのを宥めることに成功した。その入り口横の壁際に、短めの黒髪をした女の子が背中を預けている姿を発見する。

「あ、ヒナタ。もしかして待っていてくれた？」

「えっ、あ……うん。ネジ兄さんが、遅れたらペナルティだって言ってたよ」

「うう……それはもう確定かもね」

今回はなんだろう……片手使うなどかな？
なにかムチャ振りされたらとりあえず逃げよう。そうしよう。

ヒナタに向かって進むと、隣にいたいのが微動だにしていないのに
気付いた。

訝しく思い振り向くと、どこか呆然としたような、ちょっと驚いた
ような表情をしていた。

更に後方、歩いてきた方向の廊下には、こちらに向かって走ってく
るピンク色の髪をした人影が見える。

ああ、サクラ忘れてきてたんだね。一緒に帰る予定だったのか。

んじゃ”私”は先に帰らせてもらおうかな。
本気で遅れると、お仕置きが怖い……

「じゃー俺行くね。またね、いの」

「いのちゃん、また明日」

「……えっ……あ、ばいばい」

いののは、目の前から遠ざかっていく二人の後ろ姿を、ただ呆然と見
つめ続けた。

タッタツと、背後から近付く足音が聞こえるが、振り向くことすら
思い付かない。

「いのちゃん、置いて行くななんて酷いよ。」

……何かあったの？ あれって、サスケ君だよな？」

廊下での出来事を知らないサクラは、遠ざかる二人を確認し、ここ
で何かあったのかと思う。

「サクラ……あれ、どう思う？」

「あれって……？」

何が言いたいのかと訝しく思い、視線をたどった先にいた前方の二
人を観察する。

サスケの隣にいる人物の後ろ姿から、同じくノークラスのヒナタだ
とあたりをつける。

会話する際に見えたその横顔からは、男の子に対するいつもの躊躇
いが感じられない。

二人が道の端に消える頃、やっとサクラは隣に声を掛けた。

「隣にいたのって、ヒナタだよな……？ なんだか普通に話してる
ように見えたんだけど……」

ヒナタは大人しいほうの部類に入ると認識されている。

男の子に積極的に話しかける姿など、想像も出来ない。

その彼女が、学年トップで顔もよく性格も優しいと、注目を集めな
いはずがないサスケと一緒にいるのだ。
しかもいたって自然体で……

「さっきサスケ君と一緒に帰ろうって誘ったら、先約があるからっ
て断られちゃった……」

「えっ、それって……」

一緒に帰ろうと誘ったことを羨めばいいのか、先約らしいヒナタを気にすればいいのかと、少し戸惑う素振りを見せる。

いのは全身の緊張をほぐすかのように、一つ大きなため息を付いた。

「もちろん、ヒナタと一緒に帰るからって断られたわけじゃないけどね」

「ふうん……でも、その先約と関係ないわけじゃなさそうよね。それにしてもヒナタの態度、珍しかったね」

「これはヒナタに聞くっきゃ無いわよねっ！ あんたもそう思うでしょっ!？」

興味はあるけど、この友人が暴走した時には庇ってやろと、サクラは密かに決意するのだった。

21. 放課後のご予定は？（後書き）

このころのサクラは、ちょうど変わり目の頃かなと勝手に想像。
いのともまだライバル宣言してないんじゃないかな？と。

22. いわゆる逃避

雲はいいよね……自由にふわふわと漂って。

確かシカマルも好きだったはずだけど、なんかすごくよくわかるかも。

見上げるそこには、ぽかりと浮かぶ真っ白な雲と、澄み渡る青空が広がっていた。

見晴らしのいい屋上で、軽く手摺りに体を預ける。

その手摺りのどこから、きしりと鳴る音が響いた。

誰かが落ちる前に補修しないと危ないのになと思いつつも、サスケはただただ景色を視界に収める。

さして強くない風が、その漆黒の髪を乱していった。

そろそろ”私”が精神的に限界に来ているのが、自分でもよくわかる。

『あの事件』の詳しい日付なんて、初めから記憶に無い。

今日なのか明日なのか、来月なのか来年なのか……もしくは、回避出来たのか？

真綿で首を絞めるようなとはよく言うが、こんなにもじわじわと苦しみが増すとは。

いつそのこと、一足飛びに数年程時間が進まないものか。そんな馬鹿げた思いに囚われる。

こんな不安定な時に一人でいるのは危険なんだけど。

残念ながら、彼は見つからなかった。きっと任務なんだろう。

かといって、他の誰かと過ごす気にもなれない。

唯一の逃げ場所を塞がれた”私”は、ただただ落ちていくに任せるしかなかった。

明日からは、またいつも通りにきつとなるから。
だから、今くらいはいい、よね……？

誰にともなく、そう言い訳を用意する。

じわりじわりと、何かが”私”を侵食していく……

どれくらいそうしていたのか。

日陰がサスケを覆い隠し、太陽がだいぶ落ちてきた頃、屋上に誰かが上がってくる気配がした。

背後から近付いてきたその人物が、おもむろにサスケに声を掛けた。

「元気が無いのお。子供は笑顔が一番じゃぞ？」

その思わぬ声に驚き振り返ると、この里のトップである人物、火影が立っていた。

「ええ、まあ……」

どうしてここに？ まさか、タイミングを見計らって来たとか……いや、そんなハズはないか。”私”に用事とか考えづらい。

沈んでいる理由が、これから来るであろう『あの事件』のせいだと言えるわけもなく。

おざなりな返答になるのは、仕方ないだろう。

しかし、これは話をする絶好の機会ではないだろうか？

軽く周囲を確認してみると、見える範囲には誰もいない。

地位ある人が単独で動くはずがないので、暗部か何かは控えているだろうが。

危険な発言さえ回避すれば、特に聞かれても問題無いだろうと判断する。

「少し、聞いていただいてもよろしいですか？」

サスケの隣に立つ火影にそう問いかけると、鷹揚なうなずきがかえる。

それを受け、サスケはどう話をするべきか思案する。

さてと、どう話をすればそれとなく伝わるか……あまり直接的に言い過ぎると、余計な疑惑を持たれちゃうかな？

”私”はあまり会話スキル無いんだけどな。

まあ、こんな機会早々無いだろうし、頑張りますか。

「……人と人が仲直りするのって、難しいものですね。

一度離れると、相手を理解しようとすらしなくなります。

それぞれが勝手な思いから創り上げた相手の虚像に振り回されて、更に負の感情が増してしまう。

そうしてますます相手との距離が開く……負の連鎖を引き起こす。
最後に行き着くのは……存在の拒絶」

サスケの言葉に、火影は少し驚いた表情をする。

ただの子供の喧嘩ではない、何か違った印象を受けたようだ。

「そうじゃな。じゃが、人には言葉がある。話をすることによって、その道を回避することも出来よう」

「理想は、お互い歩み寄って話をするることによる、認識の擦り合わせ。ですかね？」

お互いが何を思い、何を求めているのか。それを少しでも理解出来れば、落とし所も見えてくるんでしょうけど。

実際は、なかなかうまくいかないものですね……」

「……どちらか一方でも曇った目で相對すると、どうしてもどこかで間違った結果が生み出されるものじゃ。

結論を急がず、根気よく対応していくしかないのう。

おぬしも、一人で思い悩むでないぞ？ たまには今のように、周囲に話をしてみるとよい。

きつと味方になってくれる人も出てくるだろうしの」

「……そうですね。

お時間取らせてしまい、申し訳ありません。

聞いていただけてよかったです。ありがとうございました」

「うむ。元気でやるがよい。

それと、今後もナルトと仲良くしてやっておくれ」

火影は最後に穏やかな微笑みを残し、立ち去っていった。

どこまで伝わったんだろうか？

もつとストレートに言わないとダメなのか。

なんだか期待してもいいようなそうでもないような、微妙な反応だったなあ……

はっ、まさかあの人、最後の言葉を言うただけに会いに来たとか……？

22. いわゆる逃避（後書き）

なんだかそろそろ壊れそうになってますね
ああそういえば、3代目の水晶欲しいな…

23. 嫁にやるんじゃないよ

「イタチも優秀じゃが、あの子もなかなか変わった子じゃのお。やはり、うちのは血かの。成長が楽しみじゃ。

そうは思わんか？」

執務室に戻りながら、火影はサスケをそう評する。

確かにサスケはどこか子供らしくない、変わった所がある。先程の屋上での会話にもそれが伺える。

だが、今日の彼はいつもより沈んでいた気がする。オレの部屋で悩んでいる時のように。いや、それ以上に……

太陽が沈み、闇が勢力を伸ばす頃、カカシは夕方の屋上を目指して急ぐ。

もういないだろうとは思うものの、一人佇む姿が脳裏をちらつく。

目的の建物に近付き、そこに人影を確認する。

少しの足音も立てず、屋上に降り立った。

そこには、夕方見た時と変わらぬ姿でサスケが佇んでいた。

月光に照らされるその姿は儚く、今にも壊れてしまいそうで……

ズキリと走った心の痛みに、思わず胸元に手を当てる。

サスケは何も話そうとしない。

湖に落ちた時も、部屋に来る時も。

そして、たぶん今回も……

オレに出来ることは、そばにいることくらいしかないのか。

物音を立てれば消えてしまいそうなその姿に、そつと声をかける。

「サスケ……」

ゆっくりと振り向いたその顔には、僅かな驚きと、安堵の表情が浮かぶ。

「……カカシくん……なんで……」

微かに耳に届いたその声には、少しの力も感じられなかった。その口元に僅かに浮かぶ微笑みも、無理に作ったかのように。

そんな顔をさせておきたくない。

微笑ましそうに笑う顔、はにかんだ表情、ごく稀に見せる無邪気な笑顔が思い出される。

それと同時に、最近サスケの笑顔を見ていないことに気付く。その事実には愕然とし、動けなくなった。

カカシが動けずにいる中、サスケがふらりとこちらに近付く。

一步一步、ゆっくりと近付いてきたサスケのその手が、カカシに伸ばされる。

そのままずりりと背中手手回る。

「……ごめん、このままいさせて……」

胸にも届かないその小さな体で、精一杯縋り付く。

その体が僅かに震えているのがわかる。

……泣いて、いるのか？

何も言葉にせず、それでもなお助けを求めているかのように感じた。かける言葉が出てこない。

少しでもその心が安らげるように、サスケの髪を梳き、その背をなで続ける。

『最後に行き着くのは……存在の拒絶』

夕方聞いた言葉が蘇る。

あれはいったい誰を指しているのか……

いくつか考えてみるものの、そのどれもがサスケをここまで追い詰めるには弱い気がした。

ふと気付くと、いつのまにか、腕の中の震えが止まっていた。背に回された手が、力なく落ちて行く。

そのまま崩折れるサスケを、危なげなく抱き上げる。

張り詰めた糸が切れたかのように、深い眠りに落ちたようだ。

「大丈夫、眠っているだけだよ」

死角となる建物の影に向かい、そう声をかける。

いつからそこにいたのか、その影から一人の人物が近付いてきた。黒髪に整った顔立ち、まだまだ若いながらも、確かな力を示す彼。

たぶんきつと、サスケを探しに来たのだろう。

腕の中のサスケを引き渡そうとするが、そのまま首を左右に振られる。

今は彼よりオレのほうがいいだろうと。部屋まで送るよう頼まれる。

そのまま探るような、どこまでも見通すような目を向けられる。

「サスケには、あなたが必要なようですね。

私にはそんな姿、見せたことありませんから……」

どこか寂しそうに、そうつぶやく。

「それでも、お前達は兄弟だろう。特別な絆じゃないか。切ろうと思っても切れないものだ」

「……あなたは？」

「オレは……何だろうな。友達、か。

サスケはどこかほっとけない存在だよ」

カカシは、憂いを含んだ視線をサスケに向ける。

その姿をつぶさに観察していたイタチは、徐ろに頭を下げた。

「どうか、サスケをよろしくお願いします」

「なんか、嫁に出すようなセリフだな？」

言った瞬間、まるで射殺すかのような冷たい目で睨みつけられた……

「……すまん、冗談だ。

もちろん、大切にするさ。サスケを傷付けるようなことはしないよ」

23. 嫁にやるんじゃないよ（後書き）

カカシさんとイタチさんの会話を見たかったです。

24. 『あの事件』改め、うちは事件

あれから”私”は、放課後は極力一人にならないようにしている。ネジ君とヒナタと修行したり、ナルトも一緒に混ざったり。カカシ君を見つけて相手してもらったり。

まあ、言ってしまうえば帰りたくない。帰る瞬間が怖いんだ。

お父様への話もうまく進まず、火影様にはそうそう会えない。今の立場では、これ以上どうにも出来ないのかもしれない。いや、もうとっくに気付いていたことだ。

誰か頼れる人……やはり、カカシ君に相談するべきかもしれない……

今日は珍しく誰も捕まらず、一人だった。

たまにはこんなこともあるかと思ひ、いつも使っている森で、ひたすら体を動かして思考を振り払う。

時間を忘れてひたすらのめり込んでいると、いつの間にか太陽が落ちていた。

あたりが闇に染まる中、家に向かい、里の中を歩く。

家路を急ぐ人影が、ぽつりぽつりと見える。

普段は人の多い通りも、この時間になると寂しくなるものだ。

このままカカシ君に会いに行こうかとも思ったが、任務だと言っていた気もする。

……明日こそ、いや、帰って来たら相談しよう。そうやって決断を先延ばしにする。

今日も無事一日が終わりますように――

日課になった願いを込めつつ、サスケはうちの敷地をくぐる。

その目に、道に落ちている大きな荷物が飛び込んできた。

うちのは家紋入りの布に包まれたソレ。

布からのぞくボールのような丸い毛並み。

どこまでも白い、棒状のものが布からはみ出している。

その布を、赤い絵の具が染め上げる……

反射的に家に向かってかけ出した。

進む道は、どこも赤く彩られている。

そこに落ちているマネキンのようなソレらが視界に入るも、その全てを意識から切り離す。

ただ早く、家に着くことだけ考える。

まって、まってよ、早いよ、まだ、いやだ、イヤだ、嫌だ――

「――兄さん！」

どこをどう走ったのか、いつもと変わらぬ玄関を開け、靴を脱ぐのももどかしく、そのまま家に駆け上がる。

どこにいるのだろうか？ それとも、家にはいないのか？

「兄さん！ にいさん、どこっ!？」

「サスケ、来てはならん！」

一つの部屋の中から、父親の声が聞こえた。

ゴクリと生唾を飲み込む音が、やけに大きく聞こえる。

扉に向けた手の震えが止まらない。

中からどさりと何かが倒れる物音が響く。

——開けたくない　開けてはダメだ

そのどこか悲鳴にも似た警告を無視し、震える手でその扉を開ける。
そこには、想像に違わない光景が広がっていた……

仰向けに横たわる、人形のような生氣のない母親。

それに覆い被さるようにして倒れ伏す父親。

そのあまりにリアルなソレに、今にも動き出すんじゃないかと錯覚する。

いや、先程までは動いていたんだ。

それを動かぬ物体に変えたのは……

「……にいさん……」

守れなかった。止められなかった。変われなかった。

”私”しか変えることが出来なかったのに！

この結果は”私”の選択の結果、”私”の弱さの証明……

イタチの手が僅かに動く。

決別するかのように投げられた手裏剣が、サスケの肩を切り裂いた。
その瞳に視線を合わせると、イタチの写輪眼の紋様が変化する。

その瞬間、世界が変化した。

父親の死が、母親の死が、隣人の、店主の、道行く人々の死がサスケを埋め尽くす。

切られて出来ていく傷跡も生々しく、その命の尽きる瞬間が、目に焼き付く。

そのあまりのリアルさに、自身が殺戮を犯しているかのように思えてくる。

これを、イタチ君に背負わせた……

「あああああああああ！！！」

気付いたら、両親の死だけが目の前に存在していた。

「オレを恨め。憎め。お前はオレの為だけに生かされている。

そして、オレと同じ万華鏡写輪眼を開眼して会いに来い」

「はっ……ははっ、ダメだよ兄さん。それはダメだ。それだけは出来ないよ。

あの日の言葉は取り消さない。今までも、そしてこれからもね」

サスケは崩れそうな体をなんとか支え、イタチに近付く。

「でも、大丈夫。俺は強くなるよ。きっと強くなってみせる。

ここで、この里で生き抜いてみせるよ」

サスケの瞳から、透明な雫が幾筋も零れ落ちる。

その両手を精一杯イタチの首にまわし、抱きしめる。

このまま引き止めたいが、それは不可能なことくらい理解している。
だから、せめてもの言葉を、その耳元に囁く……

「兄さん、愛してるよ……」

だから、どうか無事で……きっとまた会おうね……

24. 『あの事件』改め、うちは事件（後書き）

結局サスケの立場だと、事件回避は出来ませんでした。
ほんとこの事件は根が深いデス。

25. 事件のあとで

カカシは任務の報告時、いつもと違う里の雰囲気の原因を聞いた。数日里を離れている間に、うちは一族の惨殺事件があったそうだ。その死体は、ほぼ急所への傷のみで、欠損も少なく綺麗なものらしい。

想定外のその話に、一瞬目の前が暗くなる。

心配していたサスケは、うちは一族唯一の生き残りだそうだ。この里で唯一の……

その話を聞いた後、すぐにサスケの入院している病院へ急いだ。現在、精神的に不安定な為、数日入院させるようだ。

その間に、事後処理を行うのであろうが。

事件が事件な為、病室には個室が用意されていた。

逸る気持ちを抑えつつ、静かな廊下を早足で歩く。

すれ違う人全てに怪訝な顔をされつつも、程なく病室へたどり着いた。

その部屋の簡素なベッドの上には、少年が背を預けて座っていた。

力なく投げ出された手足。その瞳はどこか焦点が定まらず、何を見つめているのか。

左肩に見える包帯以外は、目立った外傷は見当たらない。

そのことに、深い安堵を覚える。

カカシは病室の入り口を閉め、ベッドの側にあった椅子に座る。

サスケはその行動に一切注意を払わず、視線を向けようともしなかった。

発見当時、サスケは動かぬ両親の側で、その姿を見ていたそうだ。そこに至るまでも、多くの一族の死を目撃しているはずだ。その心に、多大な傷が刻まれたことだろう。

どれくらいそうしていたのか。

今まで何の反応も示さなかったサスケが、ポツリと言葉をこぼした。

「……俺は、結局兄さんを助けられなかった」

犯人はイタチだとされている。

サスケの左肩の傷から、イタチと対峙していることだろう。

両親が殺された瞬間を目撃しているかもしれない。

それなのに、その言葉には、イタチへの悪感情は伺えなかった。

「いつか、こうなると思ってたんだ。……でも、どんなに頑張っても、俺だと何も変えられなかった。

全てがわかるわけじゃない。正解なんて知らない。何も変わらず日々が過ぎていくことに、どこかで諦めていたのかもしれない。

それでも、諦めたら終わりだったのに。俺が諦めたらっ……」

その何も写そうとしない瞳が揺れる。

事件の日の出来事でも見ているのだろうか。

「ははっ、結局逃げたんだよ。怖かったんだ。ちょっと頑張ってるふりして自分を騙して。私の行動で良くなる保証なんて無いことは、十分理解してるから。それでも……他にいなかったのに……」

父様も母様も、確かに私の両親だったのに。そんなことにも気付かずに。ただ早く過ぎ去ることを、楽になりたいとすら思っ……

今更気付いても遅すぎるよね。……私がつ、わたしが見殺しにしたくせにっ！

全てをあの人に背負わせて……何もっ……はっ、あっ……なんにもできなっ……くっ……」

自身の感情に翻弄されているのだろう。サスケの呼吸が乱れる。

苦しそうに、力ないその手が胸元をさまよう。

サスケの瞳が、怪しく真っ赤に染まる。

その瞳に浮かぶ巴紋に、僅かな違和感を感じた……

「サスケ！ 落ち着いて、大丈夫。大丈夫だよ。呼吸を意識して。ゆっくりと」

「んっ……はっ……」

カカシはとっさに椅子から立ち、サスケの体を抱きしめ、安心させるようにその背を軽く叩く。

先程吐き出された悲鳴のような言葉から、サスケの悩みの一端を知る。

いったい、どこまで読めていたのだろうか？

いつから、この恐怖と戦っていたのだろうか？

屋上での言葉は、正しくこの件を指していたのだろう。

そして、あまりに危険な予測の為、誰にも言えず、その予測を回避出来なかった自分を攻め続けるのか……

腕の中のサスケの呼吸が、徐々に落ち着いてくる。

それと共に、サスケの両手が頼りない力でカカシの胸を押す。

僅かに空いた距離。そこから、サスケの表情が伺える。

取り乱したことを恥じているのか、頬を染めつつ苦い表情を浮かべている。

その黒い瞳は先程までと違い、確かにこちらを写していた。

「……ごめん。なんか変なこと言っちゃって」

「いや、いいよ。溜め込むのはよくないからな。いつでも言ってくれてかまわないんだよ？」

それと……サスケが無事でよかった。

心配する人間が、ここに確実に一人はいるんだ。それを、忘れないでくれ」

そう、けして独りじゃないんだ、と。

サスケがコクリと頷くのを確認し、その姿を再度腕に閉じ込める。

そのまま暫く、サスケが羞恥のあまり嫌がるまで、存分にその髪を梳き、存在を確かめるのだった。

25. 事件のあとで（後書き）

あのままだと壊れそうだったので、サスケの毒抜きです。
なぜか難産でした…はう…

ホントはもっと壊れっぷりを表現したかったんですが…。

26. とある日の昼下がり

「ちょっと！ 聞いているの！？」

いつもと変わらぬ昼休み。ざわついた雰囲気に含まれるくノ一クラス
の教室内に、小さくも鋭い声が響いた。

居合わせた少女達が、何かとそちらを振り返る。

その視線の中心となった教室の後方には、数人の少女達に囲まれて
いる少女が一人、佇んでいた。

あわっわっ、どうしよう、どうすれば許してくれるかな？

それはほんの数分前、お昼にしようとお弁当を持って立ち上がった
時、たまたま後ろを通りかかった一人の少女に、ほんの軽く肩が当
たったのだった。

反射的に謝るも、小声すぎて聞こえなかったのか、何かが機嫌を損
ねたらしく、壁際に詰め寄られる。

もう一度謝罪の言葉をかける隙すら無く、いつのまにか彼女の友達
二人に逃げ道を塞がれていた。

そこから、なんだかよくわからない話になっていったのだった。

「だいたい、あんたは前から目障りだったのよ。日向のお嬢様だか
ら仕方なくサスケ君に相手にしてもらってるくせに、当たり前のお嬢
様な顔して彼の隣に立たないでくれる？ あんたなんか日向のお嬢
様じゃなかったら、見向きもされなくせにっ」

「そうよそうよ！　ちよつとはサスケ君の迷惑も考えたらどうなの！？」

彼女達の言葉に、何を言えいいのかわからず、結果的に沈黙を守ることとなった。

わっ、わたしが可愛くないのは知ってるよ？　とりえなんて特に無いし、なかなか強くなれないし……

サスケ君と一緒にいるのは、小さい頃からの友達だからなんだけど……って、友達って勝手にわたしが思ってるだけってこと？

あう……どっとうしよう……でっでも、サスケ君はネジ兄さんに会いに来てるわけで……わたしはただのオマケなんだよ？

だから、別にわたしが特別じゃないと思うんだけど。あれ？　じゃあ特別なのはネジ兄さん？

思考がぐるぐるとまとまらず、視線が彷徨う。

ヒナタのそのおどとした態度に気を良くしたのか、取り囲む少女達から更なる言葉が投げつけられようとしていた。

少女達から言葉が溢れる直前、意思の強そうな声に割り込まれる。

「あんたたち、一人相手に何醜いことやってんの？　こゝんな所をサスケ君に見られたら、何って思われるのかしらあ？」

あ、顔も名前も覚えてもらえてないんだから、何も思われるわけないわよねっ！」

忘れてた、ごめんね？　そう言って近付くいのに驚き、少女達が怒りを込めた視線を向ける。

その隙を付いて、サクラが崩れた包囲からヒナタを引っ張り、背後

に庇いつつ距離を取る。

「ヒナタ、大丈夫？」

「う、うん。でもっ、いのちゃんが……」

「あっちは任せて大丈夫。私も前に助けられたことあるしね。くやしいけど、いのに口喧嘩で勝てる子なんて、そうそういないわよ。それより、お昼一緒に食べよ？　いつもどこに行ってるの？」

「えっとね、庭にお気に入りの場所があるの。木陰になってて風が気持ちいいんだよ」

いのの独壇場を眺めながら、どこかのほほんとした会話が紡がれていった。



それから程なくして、木陰でお弁当を広げる三人の姿があった。

「それにしても、ヒナタも無事でよかったね。次また何か言われても、無視して逃げていいんだからね？　あんなの相手にすることないんだよ」

「うん、サクラちゃん。いのちゃんも、ありがとう」

「ま、何かあったらいつでも言いなさいよね。

でも、実際あの子達もサスケ君が心配だったんだと思うなあ。蹴散らしなんてなんだけど。

色々聞きたかったんだと思うよ？　けど、普段から嫉妬の対象としてるヒナタには、なかなか素直になれないんでしょ。

しかも、本人がこうんなばやばだと余計に……ねえ？」

「ちょっといの、ホントの事言ったらダメじゃない！　本人気づいてないかもしれないのにつ」

「あうう……二人ともひどいよお」

あははごめんごめん。これ食べていいから、ね？　そう言って一品ずつヒナタのお弁当に上乘せした。

ヒナタからのお返しを受け取りつつ、いのが口を開く。

「あれから結構たったけど、サスケ君大丈夫かな。

いつもみんなに心配させないように、無理して笑ってるのがわかるのよねえ。

「なんだか儚げ？　影があるようになって言うの？　そこがまたイイんだけどねえ」／／／

「ちょっといの、不謹慎よっ！（激しく同意するわっ！！）」

「ん、ネジ兄さんにも会いに来ないし、あれからここでしか顔見えないからちょっと心配、かな？

でもきつと、サスケ君なら大丈夫だよ。だってここに来てるんだもん」

そんなヒナタの無条件に寄せる信頼を聞き、二人は顔を見合わせる。サクラが視線で何か訴え、それに応えるかのようにいのが軽く頷くと切り出した。

「ねえヒナタ。私はヒナタのこと大切な友達だと、いえ親友だと思ってるのよ？」

親友が悩んでたら一緒に答えを探したい、困ってたら助けになりたい。

その為には、もっと色々なことを知る必要があると思うのよ。

……で、実際のところ……」

「「ヒナタはサスケ君が好きなの!？」」

見事なハモリを披露しつつ、真剣な目でヒナタを見つめる。

ヒナタは自分の価値を軽く見ているが、その穏やかな性格、柔らかな雰囲気、容姿も可愛い部類に入る。

そして、なんといっても見事なまでの天然っぷり。

そんなヒナタの魅力に魅せられた哀れな子羊が、かなりの数引つかかっているのだが、本人はまったく気付いてすらない。

これがライバルになるのは脅威としか言いようがない。

負けてはないが、楽勝でもない。出来ればライバルなんて遠慮したい。

二人ともにそんな事を思いながら、ヒナタの答えをただじっと待つ。

「えっ……えっと、わっわたしが、サスケ君を……?」

むっむりだよぉ! わたしなんてそんなっ

確かにサスケ君は頭もいいし強いしかっこいいし優しいから憧れるかもだけど、どこまでも高い雲の上のような存在で、いつまでも届かない目標の人で、わたしなんかとは全然違う、ものすごく遠い人なんだよ!？」

「お、落ち着いてヒナタ、わかった。ちゃんとわかったから。サスケ君のことは好きだけど、恋愛的な好きじゃないのよね……？」

サクラのその言葉は確認と言うより、そうであってほしいとの希望が幾分混じっていた。

二人の視線を受け、ヒナタは赤くなった顔をこくりと縦にふる。

ほっと胸をなで下ろすサクラといの。が、ここで安心するのはまだ早い。

今は大丈夫でも、この先どうなるかなんてわからない。

恋心なんて、自分で制御出来るものでは無いことは、身を持って知っている。

だからこそ、楔を一つ撃ちこむことにした。

「じゃあヒナタ、私とサスケ君のこと応援してくれる？」

「あ、ずるいっ! もちろんこっちも応援してよねっ?」

サクラというのが同時に詰め寄る。その勢いに押され、ヒナタは二人とも応援することになるのだった。

……でも、一番に応援するのはサスケ君本人だよ?

26. とある日の昼下がり（後書き）

女の子怖い超怖い・・・

でも、ヒナタは家の都合上、直接的な陰湿なイジメは受けないのではないかと思います。

ちょっと溜まっていたのが噴き出しちゃったんだろうねきっと。

27. 料理できたんだ？（前書き）

書いてなかったら書き方忘れました。あ〜れ〜？
読みにくかったらすみませんです。

27. 料理できたんだ？

イタチ君が”私”の前を去ってから半年程、火影様の屋敷にお世話になった。

どういふ思惑があつたのかは不明だが、火影様が”私”の後ろ盾になったということを、対外的に示す結果となつただろう。

あとは、貴重なうちはの生き残りである”私”に対する刷り込みか？
美味しい食事と安全な寢床。何も考えなくても生きていける、そんな状況。

あの頃の”私”には、かなりありがたかったが……

単純な善意だとするなら、すでに屋敷は孤児で溢れていることだろう。

残念ながら、さすがにそこまで”私”はおめでたく出来ていなかったようだ。

だが、まあ、里を管理する立場として考えれば、否定出来なくもない、か。

病院から屋敷に移ってから数週間のことは、実はあまり覚えていない。

食事以外は、ほとんど与えられた部屋に閉じこもっていた。

とにかく、考えるべき事が多すぎ、そして何も考えなくなかった。

そのうち、うちは一族の合同葬儀が執り行われたりもした。

生き残りへと向けられる、ぶしつけな好奇の視線が、ただひたすらに煩わしかったのを覚えている。

他人の視線が凶器となりうることを、改めて思い知った。

偶然生き残ったのか、生き残らされたのか。はたまた生き残りを装っているのか……そんな囁きが聞こえてくる。

所詮他人事。噂話ほど美味しいものは無い、と言ったところか。

こんなことでも、一族がかなり孤立していたことが伺える。

一族の力に縋り、過信し、盲信して、周囲を下に見てきた結果だろうか。

そんな力馬鹿は一部だったと思いたいが、こういう結果になったということとは、まあそういうことだろう。

お屋敷にお世話になって一ヶ月が経過した頃、ようやく周囲の状況に気が向くようになっていた。

最初の頃に感じた監視の目も、ずいぶん大人しくなっていた。

まだまだアカデミーに顔を出す余裕も無かったので、屋敷を探索したりして過ごしていた。

屋敷の書庫を発見してからは、かなり充実した日々を過ごさせてもらった。

禁とかなんとかあった気もするが、きっと集中しすぎて疲れていたんだろう。

そんな三食昼寝付きの楽園も、永遠では無いというのは早かったわけだが……

教壇に立つ教師の終了の声と共に、教室に弛緩した空気が流れる。いそいそと教室を出る者、早速弁当を広げる者、固まって噂話に花を咲かせる者などで一気にざわついた雰囲気包まれる。

いつものように適当にパンでも買ってこようかと腰を上げかけたナルトの前に、四角い包が差し出された。

不思議に思い、隣に座るその手の主に視線を向ける。

「お前がちゃんと食べてる所見たこと無いからな。ついでに作ってみたんだ。」

不味かったら捨ててもいいからな？」

「……え？」

軽く微笑みながら、早く受け取れと促す。

その物言いは、まるでサスケが自分で作ったかのように。その予想外の出来事に、その目をまじまじと見返した。

「ん、いらないのか？　じゃあチョウジにでも……」

「いや、いる！　いるってばよっ！」

反射的にその手を掴み、奪うように弁当を受け取る。

そのどこか必死な様子に、サスケは悪戯が成功したかのように笑うのだった。

「とりあえず、外行こうか。ここじゃ落ち着いて食べれそうにない」

サスケは軽く周囲に視線を走らせると席を立つ。

室内に残った子供達が、チラチラとこちらを伺っているのが嫌でもわかる。

さすがに事件への好奇心から無神経に近寄ってくる輩は、ことごとくナルトが牽制していたからか、今ではほとんどいない。

「ああ、わかった。……ありがとう」

ナルトは勝手に緩む頬の筋肉を叱咤し、なんでもない表情を取り繕いつつサスケの跡を追った。

木々に隠れ、うまく死角になる場所を選び、腰を落ち着ける。

サワサワと葉擦れの音が響き、遠く子供達の声が聞こえてくる。

教室内とは違い、落ち着いた平和な空気があたりを満たしていく。

二人並んで弁当を広げ、手を付けようとしたその時、近付いてくる数人の足音が聞こえてきた。

その足音が、楽しそうな声を響かせつつ近くで止まる。

視界に入ってきたのは、二人が見慣れた姿だった。

「あれ？ サスケ君？」

「サスケくん、こんな所で会えるなんてっ」

「あっ、そのっ、一緒に食べてもいいかなあ？」

ヒナタは純粹に驚き、いのとサクラはこれ幸いと行動を起こす。

サスケが返事を返す頃には、すでに左手にいのが、正面にサクラが座っていた。

そんな行動を、ヒナタはどこか感心したふうに見つめる。

応援するとは言ったが、これは応援が必要なのだろうか？

そんなふうに思いながら、サクラの隣、ナルトの前にそっと座った。

それぞれが自分の弁当を広げ、他愛ない会話をかわしつつ食事を進める。

そんな中、ナルトの半分ほど減った弁当を見、思わずというようにヒナタが言葉をこぼす。

「あれ？ ナルト君のお弁当って、サスケ君とおそろいなのか？」

「おう！ サスケが作ってくれたんだってばよ！」

「「は？」」

ナルトとヒナタの会話など、ほとんど聞いてすらいなかった二人が、そろって声を上げる。

「ちよ、ちよっとそれどういことよっ！」

「そういうことは先に言いなさいよね！ 私のと交換してあげたのにつ！（あんたが食べるなんて、もったいなさすぎるのよっ！）」

「先に言うもなにも、そんな話聞いてないし……」

そのあまりの剣幕に、女子の言い分はいつも理不尽だと思いながら、ナルトはささやかな抵抗を試みる。

が、その二人の厳しい視線に負け、サスケに目線で助けを求めた。

「二人とも落ち着いて。まああれだよ、作りすぎたからね。ナルトのはついでだよ。」

ナルトが食べなかったらチョウジが食べてたんじゃないかな」

二人はどこか納得できないながらも、ナルトのためにわざわざ用意したわけではないということで、なんとか落ち着きを取り戻す。それでも、羨ましい事実は目の前から消えることもなく、厳しい視線は相変わらずだったわけだが……

「それはそうとサスケ、お前いつも屋敷の人が用意してくれてただろ？ 今日に限ってどうしたんだ？」

「あれ？ 言ってなかったか。」

俺昨日から家に帰ってるんだよ」

「お前、それって……」

うちは一族の住んでいた一角は、今では誰も住んでいない。

そこに帰るということは、凄惨な事件の起きた現場のまっただ中に住むということだ。

もちろん、サスケの家もその現場であることに変わりはない。

「いや、気にしないで。大丈夫だから。どれだけ変わろうとも、あそこは俺の家だからね。」

部屋だけが多いから、いつでも遊びに来いよ？

なんなら泊まってってもいいぞ？」

どこか冗談めかして笑うサスケの言葉に、重くなりかけた空気がいくらか和らいだ。

その空気を知ってか知らずか、やわらかな声が言葉を紡ぐ。

「じゃあ、サスケ君はご飯自分で作ってるの？ お弁当くらい用意しようか？」

あつ、もつもちろん、ナルトくんも……」

「ヒナタずるゝい！ 私も作ってきてあげるわよっ！？」

「あんたなんか料理出来るわけないでしょ？ 私が作ってきてあげるわね」

誰の料理が一番うまいかだの、ここは穏便に順番に用意するかだの、やはりサスケの手料理が食べたいだの、それならせっかくだし押しかけてあわよくば……だの、不穏な方向に向かう話を、残された三人は少し呆れた目で見守るのだった。

「サスケ、弁当旨かったぞ。ご馳走様。お前料理も出来たんだな」

そんな燃料を投下しながら……。

28. 様子見という名の

木ノ葉の里の外れにある森の側、周囲より少しだけ背の高い樹の枝に、ひっそりと佇む人影がいた。

傍らの幹に体を預けるようにして立つその姿は、森に溶け込むかのように気配を感じさせない。

その視線の先には、かなり広い敷地が広がっている。

ここ最近は何も住まず、少しづつ荒れてきているのが遠目にもわかる。

忌まわしい事件の、その現場……

事件の痕跡は、事後処理の一環でほぼ消され、一見しただけではわからない。

だが、やはりよく見ると、それなりの現場であったことが伺える。野外だと風雨で流されるが、薄れ行きつつ、それでもしつこくそれらの痕跡は残っていた。

――うちは イタチ

当時のカカシは、彼のことをどれだけ理解していたのか。

同じ暗部に身を置くからか、その活躍は耳に入ってきた。

暗部で活躍することが、彼にとって良かったかどうかは別問題だが。

彼の冷静な判断力は、どこか硬質で冷たい印象を与えるが、暗部とはそもそもそういった性質を持つ。

闇に生き、表沙汰に出来ない汚れた仕事も数多くこなしてきた。

そんな彼でも、サスケの前では優しい兄のようだった。

優しさを装っていたのではなく、あれが本来の彼なのだろう。
サスケを見るその目から、深い愛情が感じられた。

戦闘狂でもなく、死体を作り出すことに快感を覚えるような、特殊な性癖も無いだろう。そんな彼が、いきなり自分の一族を惨殺したりするだろうか？

あまりにも彼らしくない行動だ。

計画的ではあっただろう。オレを見定め、サスケを託すような言動をしているのだから。

では、何が彼を動かしたのか。

そこには、一族を惨殺する以外には回避出来ない何かがあったのだろう。

逆らうことも出来ない圧倒的な力に屈したか、あるいは……

視線の先に、ひととき立派な屋敷をおさめ、監視任務の傍ら、カカシは危険な思考に走る。

その思考を止めるかのように、何かが頭にぼふっと落ちてきた。

里の中でのサスケ監視と危険が無い任務とはいえ、任務中であることに変わりはない。

それにも関わらず、その何かの気配に気付けなかった自分の迂闊さを呪い、反射的に右手に持ったクナイを向ける。

切っ先が頭上の何かに触れる寸前、それが知っている気配を発していることに気付いた。

クナイを下げるのと同時に、頭上の何かが体勢をくずしたのか、落

ちるように顔にへばりつく。

もふもふした感触に笑みを浮かべつつ、左手でその何かを支えた。

「爪は立てないでくれよ？」

そう言いながら、カカシは顔面の毛玉を優しく引き剥がす。

手の中には予想通りもふもふした毛玉……黒い子猫が存在していた。

「気配を消すのが上手いな。その体のせいかな？」

「にゃ〜？」

こてつと可愛らしく首を傾げるその姿に、おもわず目尻が下がるのを自覚する。

声帯の違いからか、その姿のままでは喋れないのだろう。

軽い音を立てながら、その姿が見慣れた黒髪の少年へと変化した。

首にぶら下がるその体を片腕に座らせ、落ちないように背中をしつかりと支える。

さすがにこの高さから落ちれば、ただではすまないだろう。

「おなかすいてない？ ご飯、食べてくよね？」

子供特有の高く澄んだ声が、耳元をくすぐる。

その誘いに、否やと言えはるはずもなかった。

それにしても、サスケが家を出たことに気付かないとは……鍛え直す必要があるな。

肩に乗る子猫の重みを感じながら、カカシは先程まで見ていた屋敷の前に立つ。

カラリと乾いた音を立てて薄く開いた入り口を、飛び降りた子猫がするりとくぐり抜けた。

そのまま消えたその姿を追うように中へ入ると、奥から声が聞こえてくる。

「おかえり。カカシくんはいた？」

その声に誘われるように奥へ進むと、料理を手にしたサスケと傍らでくつろぐ子猫がいた。

「あ、いらっしやい。よかった近くにいて」

「なんでオレがいるって思ったんだい？」

「ん？ 火影様にでも、俺の様子見てこいって言われたんじゃない？ 子供の慣れない一人暮らしで心配かけてるだろうからね」

そう言ってサスケは少し申し訳なさそうな表情を見せる。

しかし敏い彼のこと、自分の立場を自覚していることだろう。

カカシがなぜあの場所にいたのかも……

それでも、少しも責める素振りを見せない彼に、ほんと安堵のため息が漏れる。

カカシは足元でくつろぐ子猫をそっと抱き上げる。

腕の中に収まった子猫が、ぱたりと尻尾を揺らした。

そのまま抱き上げた子猫と料理を運ぶサスケを交互に見比べた。

「影分身か……」

「うん、練習中だよ。今は気配が何か変えられないかなと思ってんだ。

カカシくんなら大丈夫だろうけど、ナルトとかには見分けつかないだろうしね？」

その無条件の信頼が心に刺さる。

先程は、影分身だとは微塵も疑わなかったが……これは言わなくていいだろう。いや、断じて言うまい。



「サスケはオレが引き取ろうと思ってたんだ」

食事を片付け、まったりと食後のお茶を楽しみながら、カカシがそんな言葉をこぼした。

唐突な言葉に、サスケが目を見張るのを楽しそうに眺める。

「……なんで俺を？」

「一人は寂しいだろう？　ここは特にね」

「それはそうだけど……カカシくんの部屋狭いじゃん。俺の寝る所すら無さそうだよ？」

「オレは任務でいないことが多いからな。ベッド使えばいいよ。
いる時は……まあ、一緒に寝ればいいか。お前のサイズなら落ち
ることもないだろ」

その言葉に、サスケは赤くなる顔を意識し、頭を抱えた。

一緒って、いっしょって何考えてんだっ!?

そんなのムリムリ無理に決まってる。何その拷問っ!

いやいやまてまて落ち着け”私”。

カカシ君は”私”^{サスケ}を子供だと思ってるんだ。ただそれだけなんだよ。
深い意味は無いんだから。

それに、たぶんきつと様子をみるのに都合がいいだけなんだ。

いやでもやっぱ無理だよおお”私”の理性が持たないって……

一緒に寝るとか……襲っちゃうよ?

もちろん、責任はとってもらうけどね? ふっふふっ

サスケはほんの少しだけ漏れたその黒い笑いに気付かれないよう取
り繕いつつ、必死に辞退するのだった。

28. 様子見という名の（後書き）

うちはの屋敷で一人暮らしするサスケを、里がほつとくわけないとすると、立ち位置的にもカカシさんに白羽の矢が立つかなとでも、別の任務もあるだろうから、かかりきりというわけでも無いそんな感じでしょうか？

29. とっておきの術

授業が始まるまでの、ざわついた雰囲気は教室に流れる。

子供達は飽きもせず、毎日騒ぎ立てている。

そんな中、窓際の席では、サスケがいつも通り手元の本を眺めていた。

その視線を1ページも捲られない本に据えながら、サスケは先程もたらされた記憶を反芻する。

里外へ探索に出している影分身の寿命が尽きたのだ。

寿命と言っても、影分身の場合、チャクラ切れか殺されるか解除するかだが。

影分身が消える際、その経験は本体にフィードバックされる。

知識、記憶、感情、その全てが。

もちろん、疲労や痛み、恐怖などの負の経験も例外なくもたらされる。

何をもってして負の経験とするか、その判断は非常に難しい為、排除することも出来ない。

そもそもそんな細かな制御は、今の術式だと不可能なのだが。

今回の”私”は、情報を求めて立ち寄った小さな村で、どこの王道ストーリーだというような襲撃を受けた。

ならず者の集団は数が多く、村人達では対処出来そうも無かった。

そんな中で、その集団の幾人かを手にかけ、幾人も傷つけた。

そして、相手が忍でないことからの油断からか、背後からナイフで貫かれた。

その後の彼らがどうなったのかはわかるはずもない。

ただただ、苦い思いが胸中に広がった。

この世界ではさして特別なことでも無い、そんな事件。

その経験から来る全身に広がる疲労と、精神にかかる負荷を思い、サスケは今からでもサボりたいという誘惑に魅了されていた。

そんな暗い雰囲気をつかさねるサスケを、数人の人物が伺っていた。

「サスケ元気無いね。ポテチ食べたら元気出ないかな？ 1枚くらいならあげるのに」

「いや、それで元気出るのはチョウジくらいなもんだってばよ」

「もうすぐあれだろ？ あいつの一族の命日。暗くなるのもわかるが、居心地悪いのは勘弁して欲しいんだよ。

ナルト、お前なんとかしてこいよ」

「ええー！？ なんでオレなんだってばよっ！ シカマルが行けばいいだろ？」

「やだよめんどくせー。お前のほうがサスケと仲いいだろ？ ほら行ってこいよ」

シカマルに押し付けられた感もするが、サスケに近いのはナルトだとの言葉に乗せられ、歩を進める。

ほんの少しの優越感と、緊張を伴いつつ、考え込んでいるサスケに

声を掛けた。

「サスケく、サスケってばよ」

「ん、何？」

その声からは、いつもの穏やかな優しさは伺えなかった。
サスケの表情からは、どこか疲れが見え隠れする。

そんなサスケの態度にもめげず、ナルトはどうやって元気付けようかと思案する。

「うーん、やっぱり元気ないか。ここはやっぱりあれだよな……
よっし、いいか見てろよっつ【お色気の術】！！！」

その掛け声と共に、軽い音が辺りに響く。

先程までナルトが立っていた場所には、長いツインテールを揺らした16歳くらいの女の子が、しなを作りながら微笑んでいた。

窓から差し込む日の光に照らされ、その髪が黄金を溶かしたかのよう
うにキラキラと輝く。

絹糸のような艶やかな髪は、サラサラとした手触りを思わせる。

10人中全ての人が振り向くであろう金髪碧眼の美少女が、期待に
頬を上気させつつ、サスケを見つめる。

……全裸で。

形よく整った、手に余るほどの二つの果実。

撫で上げたくなるような、程良く括れた腰。

太すぎず細すぎず、張りのある鍛えられたフトモモ……

どこをとっても非の打ち所が無い、完成された体。

これに引っかからない男は、よっぽどの聖人か変態ロリコンだろう。

「……………」

あまりにも唐突な出来事に、サスケは瞬きすら忘れ、彼女をみつめ続けた。

「サスケ？ お前これ気に入らなかったのか？」

反応の無いサスケの態度に、彼女は少し不満な表情を浮かべる。

徐ろに彼女は、たわなに実ったこぼれんばかりの果実を、自分のその両手で揉みしだいた。

白く繊細な手で形を変えるその様は、どこか淫靡な雰囲気醸しだす。

「ふっ……くはっ。 あっは……あははははっ！」

そのどこか危うい雰囲気を断ち切るように、サスケが笑い声をこぼした。

ふはっははは、まさか、まさかナルトのお色気の術をこの目で見る日が来るとはね。

”私”の知ってるナルトは、知識にあるナルトよりもずいぶん悪戯頻度が低いから、この術作ってないだろうなって思ってたのに。それにしても、生で見るとすごいインパクトだな。元の顔がいいからか、美少女っぷりがすごいことになってるよ。ふふっ、思わず嫉妬しそうになるな。中身ナルトなのにね？

「くくっ、ナルト。ソレ、そのサイズだと肩凝るよ？」

万年肩こりはつらいよ？

「へえ？ そうなのか？ サスケってば何でも知ってるなあ」

サスケは必死に笑いを収めようと身を振りつつ、視線で周囲の様子を覗う。

女子がいなくてよかったな。これ見てたらナルト袋たたきだよ絶対。チョウジはまだまだ花より団子か。シカマルは……ああ驚いてるなあ珍しい。

あつ、ヤバッ。キバがすごい顔してる……

視界の端では、頭に子犬を載せたキバが、真っ赤な顔で美少女の裸ナルト体に釘付けとなっていた。

「ナルト、そろそろ戻れよ。その姿は刺激が強すぎるみたいだ」

「りょかいっ」

ナルトが元の姿に戻ると同時に、何かが倒れる鈍い音がした。
サスケはその音の出所に、笑みを含んだ視線を向け、ご愁傷様と呟く。

そんなサスケの楽しそうな様子を見て、ナルトはとっておきの術が
功を奏したことを確信し、にへらっと笑った。

……でも、サスケの取り乱す姿が見れなかったのは残念だってばよ？

29. とっておきの術（後書き）

ふっはすみませんやっちゃいました！ 大変満足です

ナルトは絶対美少女に違いないと思います！

あ、チラリズムを教え込めばよかったか？

キバはこれからナルトを見るたびに、裸体がちらつくんだろうか？
ほんとご愁傷様デス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1429u/>

私がうちの彼とか無理すぎるw

2011年10月23日21時04分発行